
もう一人の御遣い様

アルムエルソ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の御遣い様

【Nコード】

N4371M

【作者名】

アルムエルソ

【あらすじ】

先程まで、暴走族に追われていたというのに、一瞬で別の場所に移動してしまったようだ。私自身、何を言っているのか、自分でも理解に苦しむものの、一瞬強烈な光に覆われたかと思えば、目の前にはまったく違う風景が広がっているのだ。そうとも思わなければやっていられない。先程まで、間違いなく駐車場にいたというのに。

そんなことを思ったのもつかの間、気がつけば、御厨春斗は一人

の軍師となっていた。軍団の所持をも認められた彼と、天の御遣い・北郷一刀。そして、遂にデレ期が到来した猫耳軍師と、数多くの三国志の英傑が織り成す、架空戦記が、今ここに開幕する。

というわけですが、私自身が娯楽でこれを書いておりますので、そこをご容赦願いたいと思います。ゆえに、アドバイス・歓迎は歓迎いたしますが、批判・誹謗・中傷といった行為はご遠慮ください。私のストレスがマツハで、胃に穴が開きますゆえ、何卒よろしくおねがいいたします。

【プロローグ】 御遣い様は軍師の悲鳴とともに

――荀？――

最近、街にも賊が跋扈するようになったとの報告は受けていた。でも、だからといって、賊がここまでだとは予想していなかった。信頼できる護衛を連れて来ていたのに、私は首筋に刃物を突き立てられていた。それも、汚らわしい男に、である。当然、この身体は身震いを起こして、すぐにでも口から罵声が飛び出るものばかり思っていた。こんな男達に屈するのだったら、と思っていたのだけれど、恐怖で身体が動かない。

私の目の前には、華琳様に護衛として付けていただいた、軍の中でも一二を争う武の持ち主の清琳――曹洪――が、脇腹から血を流して倒れている。どうやら、胸が上下しているし、辛うじて息があるといった状態だろう。相手は汚らわしい男二人。

残念ではあるけれど、恐らくもう私たち二人は助からないだろう。不意打ちを受けてしまった時点で、分かりきっていたことだったのかもしれない。町民にまぎれた賊に、刃をつきたてられた時点で、詰んでいたのだ。

（――ここで私が死んだら、軍師がいなくなるってことよね。華琳様なら心配は要らないけれど、出来ればまだ華琳様の下で……）

天の御遣いなんて呼ばれている全身精液男の存在だけが、華琳様を襲いやしないかと心配でもある。ああ、そう考えると、私はまだ死ねないような気がする。

いや、分かっている。私は間違いなくここで殺されるだろう。でも、それでも、私自身がまだ生きたいと願っているんだ。華琳様の下で、まだまだ同じ時間を過ごしたいと願っているのだ。

（——この際、誰でも構わないわ。女でも男でも、魑魅魍魎でも何でも構わない。だから、……私を、私と清琳を助けてちょうだい！）

嘆願が、どれだけみつともないことかは分かっている。男共に掴まれている腕に、怖くて声すら上げられない。抵抗らしき抵抗も出来ないけれど、せめて最後まで心の奥では反抗しよう。首筋の刃物が少し動く。首筋から血が一筋流れ出て、痛みが全身を襲う。

（——お願い！ 私は……、まだ死にたくないのっ！）

声を張り上げることが出来たなら、私に力があつたなら、そんな思いが身体を駆け上る。死ぬ間際にいるからだろうか、余計に色々なことを考えてしまう。ふと見上げると、男が下卑た笑みを浮かべていた。

（——ああ、申し訳ありません、華琳様っ！？ いきなり光が……、誰か来てくれたとも言っの！？）

強烈な光が、賊と私の目の前で突然沸き起こった。私を取り押さえている賊も、私も、お互いに数秒の間、その光景に呆然としていた。光が沸いて出るなど、前代未聞だ。とはいえ、折角の好機を逃すわけにも行かないので、私はその隙に賊から離れた。

勿論、その隙も一瞬のもの。気がついた賊は直ぐに刃物を掲げて私へと襲い掛かっていた。

——御厨春斗——

先程まで、暴走族に追われていたというのに、一瞬で別の場所に

移動してしまつたようだ。私自身、何を言っているのか、自分でも理解に苦しむものの、一瞬強烈な光に覆われたかと思えば、目の前にはまったく違う風景が広がっているのだ。そうとても思わなければやっていられない。先程まで、間違いなく駐車場にいたというのに。

「女よう、こんな隙ぐらいで逃げ切れるとても思つたのかよ！ そちのお荷物抱えてよう！」

光に目が慣れて来ると、今の状況がなんとなく分かつてきた。どうやら、暴漢に女性が襲われているというらしい。こんな状況なら、どう動くか。

決まっている。警察官の、正義感の強い父なら、身を呈してでも被害者を守ろうとするだろう。極道の、正義感の強い母なら、守りきつた後に、手を出したものを罰するだろう。

それなら、私自身がとる行動も然りだ。母には「運動に関しては、才能は微塵もない」などといわれたこともある。父には「無茶をすれば、まず命を落とすだろう」といわれたこともある。私もそう思う。そうは思うが、私には見捨てるといふ選択肢はない。仮にそれで死んでも、父や母を、誇りを持って、胸を張って迎えることが出来るだろう。

だから、自然に身体が動いていた。いつもなら、ここまで身体が早く動くことなどないというのに、考えている間には身体が動いていたのだ。こちらに逃げ出した少女を抱きとめると、自分が身代わりになるように暴漢との間に割り込む。

「ぐあつ……、があつ……！？」

少女の小さな悲鳴も聞こえるが、何より私自身が情けなくも悲鳴を上げる。初めて刃物で腹を刺された。こんなにも痛いもので、こ

んなにも恐ろしいものだとは思わなかった。

だが、まだこれで仕事が終わったというわけではないのだ。後は、父から受け取ったこの拳銃で、脅してやればいい。追い払うだけでいいのだ。

「なんだ、てめえは！ 俺達の仕事を邪魔するんじゃないやねえっ！」

「断る。……これで撃たれなくなければ……、鉛玉を受けなくなければ去れ……！」

腹を刺されると、思うように話すことすら出来ないものだ。痛み、時折声がかすれることすら分かる。だが、そんなことは大事の前の小事に過ぎない。

「……なんだ、それはよ？ 脅すなら、責めて槍でも突きつけるんだな！」

どうやら、暴漢は退くつもりはないらしい。……ならば、仕方ない。父と母よ、私は民間人を守るために、発砲します。その罪も、責任も、私自身が被ればいい。

「言っても分からないのなら……、撃つまで、だ！」

腹からの出血で、銃の照準が合わないが……威嚇射撃でもどうにかなるだろう。まさか本物の銃だと思っていなかった。本物の銃だと分かれば、暴漢共も退くことだろう。

私が銃の引き金を引く。すれば、耳を劈くような発砲音が響く。突然の発砲に驚いてしまったのか、私の傍にいる少女も、暴漢どもも、言葉を発することが出来なかったようだ。

しかし、その静寂も直ぐにかき消された。他ならぬ、痩せ男の暴

漢の悲鳴によって。

「うあ……！？ 足、俺の足が……！？ なっ、何しやがった!？」

「おい……、こいつ、妖術師か!? やべえ、逃げるぞ!？」

……おかしい。確かに、私の望むとおりに暴漢は退却したものの、その反応はおかしすぎるだろう。銃で撃つことのどこが妖術師なのだろうか。そもそも、妖術などという胡散臭いものを、現代の日本人の何人が信じているだろうか。

……ここは、日本ではないのだろうか。

「うぐあっ……、もう、無理、か……？」

「ちよつと、あ、アンタ……!？ いきなり倒れないで……って、きやああああ!？ 血っ、お腹から……ものすごい出血してるじゃないの!？」

「……君は無事か？ それなら、身体を張って助けた甲斐があった。だから、笑っていて欲しい。私は、誰かを助けて逝けたのだと、胸を張って逝きたいのだ」

先程まで一言も発しなかった少女が、突然悲鳴を上げる。私の着ていた聖フランチェスカの白い制服は、血を含んで真っ赤に染まっていた。先程まで恐怖で心が支配されていたであろう少女は、暴漢が逃げたことでその意識を取り戻したのだろうか。今度は、目の前で出血しているのが見て分かる俺と、倒れている少女を見て、血に怯えているのかもしれない。

「ふっ、ふざけないでよっ！ 今、手当てをするから……、じつと

してなさいよ！」

「……この近くに、病院はないのだろう？」

「病院はないけれど、今は城に名医がきているから……、私を助けてくれたアンタを見捨てるわけには行かないじゃない！ そんなことをすれば、私は……私が胸を張って生きていけないわ！」

「そうか……。私の名は、御厨春斗。極道の母と警察官の父を持つ、一介の学生だ。君は……？」

「私は……、姓は荀、名は？。字は文若。……真名は桂花よ。男なんて汚らしいけれど、特別に私の真名を許してあげるわ。……だから、死ぬんじゃないわよ！」

「……善処してみるよ、桂花さん……」

「ちょっと、アンタっ！？ 清琳、起きなさいっ、起きなさいよっ！ この男を助けなきゃいけないんだから、早く起きなさいよ……！！」

当然といえば当然過ぎた。超全的な回復力を持つ人間や、不老不死の人間でもない限り、大量の血を流し続けて生き延びられるわけがなかった。

幸い、桂花さんは首筋を少し切られただけで、もう一人の少女も脇腹を刺されているものの、動脈を傷つけられていないために、出血量はそれほどでもない。

二人の少女を救えたのだ。後悔はない……と思うと、身体に限界が訪れたらしい。

耳に桂花さんの悲鳴らしき声が聞こえる中、私は意識を失うこと

になった。

――荀？――

最初に現場にたどり着いたのは春蘭と秋蘭だった。私のせいで二人の犠牲者を出しそうになっていたためか、春斗と名乗った男と護衛の清琳を助けようと思えば思うほど、私は焦っていたらしい。軍師である私が、焦ってはいけないというのに、この春斗の苦しむ顔を見てると、余計に焦ってしまっていた。

「落ち着かんか、桂花！ 大体状況は理解できている。大方、こいつが清琳とお前を襲ったのだらう？ 汚らしい男だ……、意識もないみたいだが、切り捨ててくれる」

だからだろう。まさか私が、春蘭に諫められるとは思わなかった。そつよ、落ち着きなさい桂花。私が落ち着かなければ、命の恩人であるこの男を切られてしまうのだから。

「いいえ、違うわよ春蘭。その男は私たちの命の恩人。だからその刃を下ろしてちょうだい」

「何を言っているのだ、桂花！ この状況なら、明らかに犯人はこの男しかいないだろう！」

「違うっていつてるじゃないの、この猪武者！ 春斗に……、この男に手を下したら、いくらアンタでも許さないわよっ！」

「姉者も、桂花も落ち着け。ここで言い争っていると、この男だけじゃなく、清琳まで死なせかねんぞ？」

そうだった。今、この猪と言い争っている暇はない。なんとか私の着ていた服で応急処置はしたものの、こんなのは焼け石に水のよ
うなものだ。早く医者に見せないと、春斗は間違いなく死に至るだ
ろう。明らかに顔色も悪くなってきたているのだ。

いつもなら、春蘭を言い負かすまで、口論を続けるところだろう。
今は、そんなことに時間をかけていられないのだ。

「お願いよ、春蘭、秋蘭。清琳と、春斗を医者に見せたいの。春蘭
は二人を空き家か空き部屋に、秋蘭は城の名医を呼んできてちょう
だい。私は二人の手当てを続けるから……早く！」

「あ、ああ……。姉者、頼むぞ？」

「わ、分かった。分かったから、泣くんじゃない、桂花！」

春蘭に言われるまで、自分が泣いていることすら分からなかった。
けれど、それも今は考える時間は無い。春斗が男であっても、私に
は彼に対する嫌悪はないのだ。

男は、確かに汚らわしい存在だと思う。でも、春斗は……信じて
もいいと思う。

こいつは、心から私の無事を喜んでくれたのだ。会って、数分も
しない私の無事を、だ。なら、私が彼の無事を案じない理由は無い。
きっと春斗が無事なら、私は彼と同じように、諸手をあげてそれ
を喜ぶことが出来るだろう。大丈夫、もう少しの辛抱だから。

——アンタは私が救ってあげるから、それまで少しの間、待つて
なさい！

——御厨春斗——

「……ここは、どこだ？」

いろんなことが一度に起きてしまうと、人間というものは現実逃避を起こしてしまうらしい。一応、何があったのかは理解している。どうやら私は助かったようで、腹に痛みは残るものの、五体満足で生き長らえているのだ。

「おつ、起きたのね。……いつまで寝てるつもりだったのよっ！
もう一週間も眠り続けて……心配、したんだからあつ！」

「……どうしてこうなった？」

私が起き上がってみれば、突然少女に泣きつかれたのだ。私が愚痴を言うのも頷けると思う。……確か、この少女は桂花さんだったな。姓は荀、名は？……。荀？っ！？

いやいや、待て。きつと、偶然の一致に違いない。ここは恐らく中国の地方都市といったところだろう。あれだけの人数を誇る国だ、歴史上の偉人と同名の人間が一人ぐらいいてもおかしくは無いだろう

「桂花様、春斗様がすごくびっくりされてますよ？」

「あれ、桂花って男嫌い直ったのか？」

「何を言ってるのよ、この全身精液男！ 相手が春斗だからに決まってるじゃないの」

「……どうしてこうなった？」

今、桂花さんからものすごいワードが聞こえた気もするが、ここ

は流すことにしよう。私は何も聞こえなかった、そう、聞いていなかったのだ。

「申し送れました。私は桂花様の護衛を務めている、曹洪と申します。字は子廉、真名は清琳。命の恩人である春斗様には、どうか清琳と呼んでいただきたいと」

……荀？、曹洪。三国志の時代に、魏で活躍した軍師と將軍、なのだろうか。そう仮定すると、私はタイムスリップを起こした、そうなるわけか。

……確認してみないことには仕方ないか。

「……桂花さん、清琳さん。失礼を承知でお聞きします。お二方の主の名前はどいわれるのですか？」

「私達の主の名前は、曹操様ですが……、どうなされました？」

「ふむ……。では、その傍には夏侯惇、夏侯淵両將軍はいらっしゃいますか？」

「……どうやら、全身精液男の言うとおり、天の国の民みたいね」

……この世界は本当に三国志の世界のようだ。タイムスリップなど、本来そのような非科学的すぎる内容は信じられないものだが、こうなつては信じるほかはあるまい。

それにしても、天の国というのはどういうことなのだろうか。この世界での倭の呼び名……というわけでもあるまいし。

「……やっぱり御厨か。改めて自己紹介をする必要も無いだろうけど、北郷一刀だよ」

「……北郷!？」

私が柄にもなく素っ頓狂な声を上げてしまったことを、いったい誰が責められるだろうか。三国志という、随分と過去にタイムスリップをしてしまった中、クラスメイトと出会ってしまった、この私を。

「……それでは、今は黄巾の乱の前と。それで、一刀は魏に仕えているということか」

「正確には、まだ魏は出来ていないんだけどね。華琳に仕えているというのは間違いない。いつ切り捨てられるか分からないけどさ」

「ふむ。タイムスリップした人間が天の御遣いか。そうになると私も天の御遣いということになるが……、肩書きは正直どうでもいい」

桂花さんと清琳さんをお願いして、一刀と二人だけにしてもらってから、この世界のことを色々と先人である一刀に教えてもらった。どうにも、ここにタイムスリップしてしまう現象自体が不明なので、戻れるかどうかすら分からないとのことだ。最も、私や一刀の介入で、この歴史が本来の正史どおりに進むことはまずないだろう。この世界では、この世界での歴史が展開される。ただそれだけだ。

「それで、行く当ても無いんだつたらと、華琳が雇うと言ってたけど」

「……では、その言葉に甘えさせてもらおうとしよう。私と一刀で、

曹操殿を大陸の覇者にしてみるのも一興かもしれない」

そう、どうせ本来の歴史を外れた世界だ。私自身が生き延びるためには、曹操殿が負けないように自身も奮戦するだけだろう。魏が滅亡すれば、私達も命を失うのだから。

今までたいした接点があるわけでもなかったクラスメイトだったが、この世界では唯一かもしれない、向こうでの友人だ。お互いに名前呼び合うと、私と一刀は握手を交わした。絶対にこの世界では死なない、曹操殿を大陸の覇者にする。

そう、お互いに誓っての、固い握手だった。

――荀？――

「曹操様、お会いできて光栄にもいます。北郷一刀の友人で、御厨春斗と申します」

「私こそあえて光栄だわ。私の桂花、清琳を助けてもらったこと、とても感謝してるわ。一刀の友人ということは、あなたも天の御遣いかしら？」

「そういうことになるかとは思いますが、その肩書きは不要にございます。私は、私自身の力だけで、必ずや曹操様の力になることをお誓い申し上げます」

「そうね。天の御遣いが二人いるとなると民も動転するでしょうし。では、改めて伝えるわよ。御厨春斗、あなたを我が軍の一員にくわえる。私のことは、今後、真名である華琳と呼んで構わないわ」

「はっ！ 華琳様のために、尽くす所存です」

うれしい誤算だったといえば、嘘になる。私が男を迎え入れることに諸手をあげて賛成したのは、その相手が私の命の恩人だからに違わない。でも、どうしてなのだろうか。

華琳様よりも、その男を……春斗を気にかけてしまうのは、どうしてなのだろうか。

「希望の役職は……文官、又は軍師ね？」

「恥ずかしながら、武にはまったく才能がありません故」

「なるほどね。桂花、あなたに春斗の教育を命じるわ。一人前の軍師に育て上げてちょうだい」

「はい、お任せください、華琳様っ！」

私が春斗の教育係を引き受けることになり、そのことに嬉しさを感じたのは、華琳様に信用されて仕事を回されたからではない。私は、そこに気が着いてしまったのだ。

私が嬉しかったのは、春斗に教育を施せることだ。

男と同じ空間に、それも長い間いるということ。以前の私だったら、間違いなく卒倒していた自身がある。春斗じゃなければ、今にでも卒倒できるだろう。

……簡単だった。本当に簡単だった。

春斗と全身精液男、春蘭と秋蘭が部屋を出て行ってから、私は自分が出した答えを口に出してみた。

「……悪い奴じゃないわ。少し無謀なところはあるけれど、それでもあれ以上の男は現れないわ」

「だから、桂花はその男に惚れてしまったのね？それは仕方ないわ私だって、ああやって身体を張って助けられれば意識してしまうわ」

「そうですよね、華琳様っ！？　って、今のは、その、そうではなくてですね！」

自分自身に言い訳をして、惚れたわけじゃない。気の迷いだと言張しようとした。主張しようとしたにもかかわらず、一番聞かれてはいけない人に聞かれてしまった。

「いい傾向だとは思うわ、桂花。でもね、春斗が一人前に仕えるようになるまで、告白とか結婚は認めてあげないわ。どうしてもそういう関係になりたいなら、がんばって彼を教育することね」

そう、華琳様に聞かれたら絶対に嫌われるから……、って、嫌われてない？

それどころか、何故か結婚を後押しされてさえいる……？

「あつ、あの華琳様……？　今のは、一時の気の迷いで……」

「いいのよ、桂花。桂花も春斗も、二人とも私のものなんだから。だから、全力で春斗を鍛えることね」

でも、違うのです華琳様。この感情はきっと一時の気の迷いからです。

そう、男の中では一番まとまとは思っけれど、それでも私が春斗を好きになるわけが無い。私が好きなのは華琳様だけだ。それは間違いない……と思う。思っけれど、そう考えると、胸の奥が少しだけ痛む。本当にどうしてしまったのだろう。

と私が思考の渦に飲み込まれていると、華琳様が微笑みながら部屋を退室しようとしていた。

「だから、違うんです！　華琳様ーっ！」

私には、ただそうやって、精一杯に叫ぶことしか出来なかった。

【プロローグ】 御遣い様は軍師の悲鳴とともに（後書き）

暑い季節にはアイスクリームに限ります。2リットル入りのアイスクリームが500円で売っていたので、二個も購入してしまいました。

美味しいんですけどね、いっぺんに食べるのは無理です。それも、飽きそうという。

というわけで、皆様始めまして。アルムエルソと申します。

アルムエルソ……メキシコで言うランチです。私の生活スタイルを一言で表すところなりますね。って、私の話はどうでもいいですね。

初めて恋姫のSSを書かせていただくわけですが、これが思いのほか難しいものですね。なにより、執筆経験というレポートや卒論ぐらいしかないもので、駄文によってお目汚しをすることを、最初に謝っておくことにします。申し訳ないです。

これから精進して行こうと思っておりますので、お付き合いいただける方はよろしく願います。

ただ、私も楽しみながら書かせていただきたいと思うので、アドバイス等は喜んでお受けしますが、誹謗とかだと私が落ち込むので遠慮してくださいと幸いです。

意見やアドバイスであれば、厳しいものであれ戴けるのは嬉しいのですが、ただの誹謗とかだとげんなりしてしまうので……。

で、本編ですが。

いきなり賛否両論あると思いますが、ここでの桂花は99%以上のツンツンではありません。

ここでは、桂花はメインヒロインですから。

といことで、ここでは桂花のデレモードが見られるようになると思います。見られる方向で構想しておりますからね。勿論、一刀には辛辣な言葉を投げかけるわけですが。

又、今回いきなりオリキャラである清琳がありますが、今後何人もの恋姫化されていない武将が恋姫化されて出てくると思われまふ。小説的にはあまり人数が多いとダメだとは思うのですが、ご容赦願いたいと思います。

出来るだけ、多くの武将を活躍（戦や政的にも、小説的にも）思っております。

……恋姫武将だけじゃ、正直人手が足りないと思ったのです。

ただ、余りにもマイナーどころの武将は出てこないと思いますので、悪しからず。

それでは、また次回にお会いできれば幸いです。

【黄巾征伐編・第一話】 王佐の才、苦悩の日々の始まり

【黄巾征伐編・第一話】 王佐の才、苦悩の日々の始まり

―御厨春斗―

「字に関しては、もう教えることもないわね。軍略はこれから仕込んでいくけれど、政務に関しても全く教えるところが無いかもしれないわ。それどころか、私が学ばせてもらってるかもしれないぐらいよ」

やけに嬉しそうに桂花が胸を張る。どうやら一刀のことは毛嫌いしているようだが、それでも流石は未来にも名を残している人間だ。私の考えていたよりも、ずっと優秀で頭の良い人だった。

そんな人物に気に入られている以上、私としても悪い気はしない。

「本当に、あの全身精液男とは比べ物にもならないくらい優秀だね。春斗と一緒に仕事が出来るようになって、本当に良かったわ」

「それは買い被りすぎではないか、桂花。褒められれば悪い気はしないけれども、まだまだ至らない点もあるう」

桂花に私が提案した政の資料は二つだ。一刀と私で、未来の知識を活かしながら形成したものだ、この世界は違う歴史を歩んでいる。問題ないだろう。

その一つは、農業の充実策である。

「この屯田兵という提案は面白いわね。常備兵でなくとも、それなりの錬度を保て、尚且つ農耕まで潤う。職にあぶれた者の働き口に

も出来るかもしれないわ」

そう、一つがこの屯田兵制度である。

街を中心として、これだけ多くの平野が広がっているのだから、土地に困ることは無い。後は、そこを農耕に適している土地であると判断したら、開墾させる。

農作業には、力が要る。毎日続ければ、それだけで筋肉がつくほどだ。

特に新兵などは、筋肉を付けさせる点でも、農耕はプラスになる。言ってしまうえば、実戦以外の面では、訓練になりえるということだ。

「更に、本来捨てるようなものを畑に撒くというのも新鮮よね。捨ててた部分が肥料として農耕を潤すなんて」

次に提案したのが、新肥料の導入である。といっても、この時代に化学肥料などがあるはずも無い。ゆえにここで提案したのは、城や街で出た生ごみの類を、畑に撒かせる肥料とすることだ。これに関しては、実験によって結果が出るまでは採用されない可能性もあるが、考慮のひとつにでも入ってくれば幸いだ。

肥料の作り方も、そこまで難しいものでもないため、一度説明をすれば長期的に作成できる肥料となるだろう。

「最後に、用水路と溜池ね。確かに、農業などでも住民の生活の面でも水は重要だから、これもいい案だね。とはいえ、川を引くのは少し難しいかもしれないけど」

それから、河から用水路を引っ張ることだ。飲み水などは井戸の水を使っているわけだが、その他の生活用水に使えるように溜池を用意させるというものだ。

本当なら、灌漑を提案したいところだが、まだここで米などが取

れるかも分からない。もう少し様子を見てから提案したほうが良いだろう。

さて、私が提案したもうひとつの策というのは役所の設置である。

「もう一つの、役所の設置に関しても良い案だと思うわ。ただ、目下の問題は文官の数かしら」

「最低限文字が書ければそれでいいんだが……、何人出せると思う？」

「……2人が限界ね」

私と桂花以外にも、当然ながら文官の類はいる。しかし、農業政策に警邏の政策まで行わなければならない今、文官の数が圧倒的に足りないのだ。

しかし、民の信頼を得るためには、民の陳情にも耳を傾ける必要があるだろう。

役所は、いわゆる目安箱の代わりだ。民の困りごとや感想を集めるための施設に過ぎないのだ。

「それじゃあ、二名を派遣するとして……。昼食時〜夕方までの時間制にしよう」

「……そうね、それが無難かしら。草案に関しては私が上手く纏めておくわ」

荒削りなところはあるけれど、初めてにしては上出来どころじゃないわ。そうやって桂花は私の案を褒めてくれた。以前母や父に褒められたことを思い返すと、少々恥ずかしくも思うが、折角の賛辞

だ。

「……ところで、あの黒い武器みたいな奴はなんだったの？」

「……これか？ これは拳銃といって……そうだな、弓矢の類だと思ってくればいい。弓よりも小さい動作で、金属の弾を打ち出し、相手をしとめるものだ」

「これが弓……？ これって量産できないのかしら？」

「残念ながら無理だな。これにも弾がもう入っていないし、使い道も無い」

もともと、警察に与する極道の息子として生まれた私は、生まれながらにして命を狙われる存在だった。聞いた話だと、警察署長の父に、母が一目惚れして結婚したらしい。

幼少のときから幾度と無く他の組に命を狙われていたためか、父と母は私に拳銃の使い方を教え、護身用にと銃を渡してくれた。

これが無ければ、今頃私も桂花も清琳も生きてはいなかっただろう。父と母には感謝してもしきれない。

「華琳様にはそう伝えておくわ。それと、実物をもらってもいいかしら？」

「ああ、もう使い道も無いしな。……ただ、一刀には向けてやるなよ」

「大丈夫よ、期待通りにしてあげるわ」

面白いことでも思いついたとばかりに、桂花が笑う。これで、何

かをたくらんでいるような笑顔でなければ、もっとかわいく笑えるだろうに。

華琳様としても、あまり未知なものを放置できなかったのだろう。調べられて不都合なことは無い……はずだ。この時代には無い素材も使われているかもしれないが、そんなのは私達の制服の時点でアウトだ。もはや気にするまでも無いだろう。

「それじゃ昼食にしましょう。清琳と合流して、街の警邏と情報収集に出るついでに、どこかで夕食にしましょうか」

「ふむ、もうそんな時間か。どうにも桂花と一緒に仕事をしていると時間が経つのを忘れてしまうな」

「そつ、そう？ それなら私としても嬉しいわ。まだ七日間しか経っていないけど、春斗と共に仕事をしている時間は、私の中でも一番充実している時間だもの」

それだけ言うと、桂花は顔を赤らめてすたすたと歩き出してしまった。何か気に障ることもあったのだろうか。それとも、何か恥ずかしいことでもあったのだろうか。

少しだけ考えにふけていると、『早く着いて来なさいよっ！』と桂花が急かすものだから、私は急いでその後ろ姿を追いかけることにした。

――荀？――

ああ、もう……何やってんのよ、私は！

華琳様に言われたわけでもないのに、何で赤面してるのよ。それも、男相手に……。本当に、一生の不覚に違いないわ！

確かに私だって、春斗と政務をしたりする時間は楽しいと思うけれど、って誰に言い訳してるのよ。私が嫌いなのは、自分では何も出来ない汚らしい男であって、優秀なら認めなければならぬじゃない。……あの全身精液男は別だけど。仮にあれが優秀だとしても、私は一生認めない。あんな奴さつさとくたばればいいのよ。

って、そうじゃなかった。今日は街の状況などを春斗に見せるために、昼食は街の中ですることになったんだ。華琳様にも許可はいただいたし、これは仕事。

……デートなんかじゃないんだから。

だから、清琳を連れて行くことに逡巡したのは気の迷いに違いはない。きつとそうだ。

「それじゃあ、店まで案内を頼むわ。清琳の行きつけの店なんですよ？」

「その通りです、桂花様。私以外にも、春蘭様や秋蘭様も行きつけと聞いております」

「それは期待できそうね。その後は、街を案内する予定だから、春斗は出来るだけ現状を理解してちょうだい。料理屋、診療所、商店の数とか、知りたがっていたものね」

「ああ。診療所が一定数以上あれば、是非提案したい案件もあるかな」

どうやら春斗には、まだまだ提案があるらしい。将来的には、私と二人三脚で華琳様を支えていくことになるだろう。……意外と楽しみな。

「桂花様……、頬が緩んでおりますよ？」

「なっ、なんでもないわよっ！」

春斗には見えなかったみたいだけれど、清琳に教えられて表情を引き締める。確かに二人三脚で華琳様を支えていくことになるけれど、それは決して変な意味じゃない。

そう、変な意味じゃないの。華琳様の頭脳として傍に仕えるだけ。軍事の方面、とりわけ武力に関しては、猪武者の春蘭と全身精液男にでも任せておきましょう。認めたくは無だけれど、あの全身精液男は、ここでも一二を争う武官になるだろうから。

「……桂花の百面相だな」

「華琳様の前以外で、ここまで多くの感情を見せること自体が意外ですよ」

私の考えていることに連れて、表情も変化していたことに気がついたのは、二人にそれを指摘されてからだ。本当に不覚だ。今日は厄日、間違いない。

穴を掘って埋まりたい気分よ。今なら温泉だって掘り出せそうな気がする。

「そんなことどうでもいいから、さっさと店に案内しなさいよっ！」

「桂花様、もう店には着いているんですが……」

少し恥ずかしくなって、急いで話題をそらした……つもりだった。自然な話題の切り替えとは、お世辞にもいえなかったが、それによってまた恥をかくことになるなんて。

…… 本当に今日は厄日だわ。

清琳の案内してくれた料理屋は、確かにとても美味しい店だった。私はもともとそんなに食べられる方ではないので、ラーメン一杯でお腹一杯だけれど……。

「春斗、ラーメンと餃子と炒飯って……どんな胃袋をしてるのよ」

「そうですね、春斗様。主食三つでは、食べすぎもいいところです」

清琳もラーメンを一杯しか食べていなかった。だけど、春斗だけは違う。

確かに美味しそうに食べてはいるんだけど、その量が常人の食事量じゃない。どこに主食を三つも一食に食べる人間がいるのよ……って、目の前にいるから問題なんだけど。

見てるだけで、お腹が一杯になるというのはこういうことなのだろう。

「これぐらいは普通だろう？ 私の国では、これで一塊だったぞ」

「……信じられないわ」

これで一人前なんて……。春斗の国の人間は、みんな大食漢なんだろうか。

ああ、でも食事を美味しそうに頬張っている姿は……って、そうじゃないわ。

「……桂花様、涎が垂れておりますよ？」

ああ、またやってしまった。今のは、春斗が食事しているのを見てこうなったんじゃない。これが華琳様だったら、さぞかし可愛らしい顔を見せてくれると思ったら、涎が垂れてしまったのよ。

……生理現象なんだから仕方ないじゃない！

「桂花様。春斗様が食事に夢中ですから進言致しますが、春斗様に夢中になるのも無理はないかと思えます。私達の命の恩人でもありますし」

肩口まで伸びた美しい金髪を左右に振って、頬を押さえる清琳。華琳様同様の吸い込まれそうな青い瞳で春斗を見つめるその姿は、私から見ても恋する乙女そのままだった。彼女も直接見ていないにしろ、春斗の勇敢さ―私から言わせてもらえば、無謀な気もするけど―に惚れたというところだろう。

そういえば、いつも着ている武官服よりも少しばかり露出が多いのはそういった理由なのかもしれない。でも、それ以上服の丈を短くしたら痴女が出たと騒がれそうな気もする。

春斗には全く意識されていない辺り、空回りってことになるんでしょうけど。

……後で釘を刺しておきましょう。

結局、不覚にも料理屋を出るまでの間ずっと、私と清琳は、春斗から目を反らすことが出来なかった。

……黒歴史だわ、忘れないと。

――御厨春斗――

桂花に案内されて歩く陳留の街並みは、そこそこの治安を持っていてよかった。というのも、新しく警備隊に配属された………といったいいのかは分からないが、そんな一刀の努力もあって、警備に

関してはあまり問題は無い。

この前の暴漢騒ぎは、聞いた話だと黄巾党の一派であったという。今は警戒を強めているため、周囲からの賊の侵入は許していないとのことだ。

「診療所はここを含めて、後二箇所ね。それにしても、診療所なんて何に使うのよ」

「定期健康診断を提案しようとしたんだ。最低限将に限ってでも行えば、一定以上の成果を挙げられるだろうし」

桂花に最初に案内してもらったのは、街の中の診療所だった。町の北と中心、それに南に一箇所ずつ位置する診療所が存在していた。今は財政の問題もあるが、財政面さえ工面できれば、民の為にいくつかの診療所を開くことも出来るだろう。

そうなれば、衛生面も改善されるだろう。……上手くいけば、だが。

もつとも、オーバーテクノロジーなものが多数存在している世界だ。意外となんとかなるのかもしれない。

「それで、今日は豪商が二家も来ているのよ。華琳様の命もあって、これからそこに行くことにするわ」

次に案内されるのは、どうやら豪商の場所ということだ。商店を案内するよりも、多くの商品を有している豪商の場所なら、この時代のことを更によく理解できるでしょ、と桂花は微笑んで教えてくれた。

なるほど、一理ある。どこまでの技術があるのか、知っておきたいところでもあったし。

しかして案内されたのは、なるほど、確かに他の家屋に比べると、

比べ物にならないほどの立派な家だ。……というか、これは家なのだろうか。現代で言うところのホテルに近い気もする。

「今日は面会できて嬉しく思います、荀文若様。私は、徐州の糜竺二字を子仲と申します」

「同じく徐州の魯肅、字を子敬と申します。そちらの方は、先日曹孟徳様の軍に加われた方でよろしかったでしょうか？」

「孟徳様の下で、軍師となるべく勉強をさせていただいている御厨春斗と申します。本日は、我が師である文若と共に、お会いできたことを光栄に思います」

……考えてはいたものの、予想が的中したために、少しばかり頭が痛いところでもある。

いや、理解してはいたし、考えてもいたのだ。曹操、荀？、曹洪、夏侯惇、夏侯淵。風の噂では、劉備や孫堅も女性と聞いていた。この世界で、能力のある人物のほとんどは女性として命を授かっているということなのだろうか。

色々と突っ込みたいところはあるものの、正史では蜀で文官をする糜竺、呉で外交官をする魯肅の二名はそろいもそろって女性だった。

「この街は随分と栄えておられますね。商人としては、何か買っただけの環境が整っていることを嬉しく思いますよ」

魯肅さんが、微笑みながら町を褒めてくれる。ついで、糜竺さんが『徐州の二大商家に揃えられるものならば、何でもお売りしましよ』と商人っぽく笑いかける。

「春斗、何か揃えたい物はあるかしら？」

桂花の言葉には、個人消費だけでなく、政に重要になりそうなものは無いか、というニュアンスも含まれている。なるほど、未来の知識を含めて、必要そうなものを購入しろとのことか。華琳様もなかなか考えた人選をするものだ。

一刀は役職上武官に位置するため、文官仕事は私に任せるとのことなのだろう。

「ふむ……、出来れば薬や医術書、それと不必要になった糧食の一部をお譲り願いたい」

「薬や医術書は分かりますが……、 unnecessary 糧食ですか？」

「そうです。それが、農業の促進を手助けする肥料にもなりますし、民の生活の向上には不可欠かと」

私の言葉に、首を傾げる魯肅さんと、糜竺さん。魯肅さんは、白色の司祭服のようなものを見につけた方で、赤色の肩までの短髪をいじりながら真剣に悩んでいた。その緑色の瞳は、何かを見極めようとしているようにも見える……。

もう一人の糜竺さんは、桃色の看護師の服に似た衣装で、幼い顔に表情を浮かべながら、可愛らしく首を傾げた。長めの緑色の髪が揺れ動くが、俺のことは見つめてくる青い瞳が、まったく反れなかった。

どうやら、二人とも俺の考えを見極めようとしているのか、それとも商売相手にふさわしいのかと考えているのだろうか。

「では、細かい商談はまた後ほどということでしょうか？」

この場では商品を融通できないということだろうか。まあ、この場では商談が出来ないということでもあるだろう。

こちらが欲しているものは、それなりの量に達するのだから。

「仕方ないですか。だいたいどれぐらいで用意できますかね？」

「そうですね……、具体的な商談は一週間ぐらい後になってしまいますけれども……」

何かを隠されているような気もするが、商談をこれ以上進めないことには仕方ないだろう。何よりも、品定めをしているような魯肅さんと糜竺さんの、探るような視線に耐えられないというのもある。

「……それでは、私達は街を廻ってから陳留を出発します」

「次回はもう少し大勢で伺いますので、それなりの大広間をご用意していただけると助かります。曹操様とも商談を持ちたいところで」

魯肅さんが恭しく一礼すると、糜竺さんもそれに続いて部屋を出る。私と桂花もそれを見届けてからホテルのような大家を後にする。清琳を引き連れると、城に戻る前に他の商店と料理屋の場所を確かめていく。

……なるほど、街の規模的には最低限の商店と料理屋はあるか。もともと、診療所の数は少し少ないような気もするが、そこは今後の内政次第か。

「……最低限の目的は果たせたかしらね。これで上手く行ってくればいいんだけど」

「……徐州とのつながりを持つことか？」

「良く分かってるみたいね。徐州を得ることもそうだけど、徐州の優秀な人材を陣営に引き込むことが主目的よ。徐州の陶謙は随分と重い病氣らしいから」

それが華琳様と桂花の最終的な目標だったらいい。陶謙の病が随分と重いことは分かっていたらしいが、それにしても目的は人材か。人材コレクターには相違ない、といったところか。

徐州といえば、臧霸、孫乾、呂岱、張昭、更には現在あの太史慈もいるとの事だ。文官、武官共に申し分ないだろう。

これだけの人材を召抱えることが出来れば、華琳様の天下への最も近道になるだろう。軍師として活躍できずとも、文官として活躍できれば華琳様のためになるのだ。

「それでは、我らと同盟を結んでもらえるということでもよろしいでしょうか？」

謁見の間には、華琳様と私と桂花に清琳、それと陶謙軍側の陶謙、陳登、王朗、朱治。それから立会人として糜竺さんと魯肅さん、後一人初めて見る女性が残っていた。

なるほど、魯肅さんの言うとおり、これは大きな商談だ。

売り手は陶謙さん、といったところか。

「良いわ。しっかりとその目で判断することね」

「……それで、そっちから一人文官をよこして欲しいわけよ。そうね……その男を貸してくれないか？」

「……私か？」

確かに、同盟を締結した以上、助け合うことは確かなのだが……。それで派遣される人材が私というのはどういうことなのだろう。まだまだ仕事らしい仕事をこなしたわけではないというのに。

「桂花を派遣するわけにはいかないし、妥当な辺りね」

「……行けと言われれば、頑張っては来るが」

……ということで、私の派遣によって同盟が締結された。
私なんかで本当に良いんだろうか、陶謙は。

「同盟締結に従い、曹操様と陶謙様の下で、徐州及び陳留の民の為に働かせていただくことになった、陳登です。字は元龍、真名は水藍と申します。今後は仲間となるお方ですので、どうぞ真名でお呼び下さい」

最初に一礼したのは、陳登と名乗った女性だった。彼女は、桂花と同じくらいの体躯なのだが、將軍も経験したことがあるという。確かに、体格的には一騎打ちなどには向かないだろうが、服装も動きやすそうなショートパンツで、隙を見せないあたり優秀なのだろう。

「王朗なのです。字は景興、真名は胤と申します。どうか、よろしくお願いいたしますです」

次に一礼したのは王朗と名乗ったのだが、これがどう見ても少女だった。いや、少女というか寧ろこれは幼女といっても過言ではなかった。黒色のボブカットの髪といい、背負っている鞆らしきもの

が、どうにもランドセルを連想させ、小学生にしか見えないという状態だった。それでも、優秀な文官との事だ。

「朱治でございます。字は君理、真名は衣です。……それにしても、文若様は良い伴侶をお持ちのようですわね？」

「なっ！？ 誰が誰の妻だっというのよ!？」

最後に陶謙側で一礼したのが、朱治である。彼女はある意味で一番の問題を持った将であり、人をからかうのが好きという性格なのである。

その格好たるや、何故水着なのかと突っ込みたくなる格好である。水軍に定評のある呉に仕える武将だからかもしれないが、それで兵士を誘惑されては困る。

更に現在も桂花をからかって遊んでいるようである。それを見て華琳様も笑っているあたり、意外と相性はいいいのかもしれないが。

「では私達ですが……、暫くの間春斗様のお手伝いをする事になっておりますので」

「……なるほど、監視役というわけですか？」

「……監視役じゃないですよ、お手伝いです。他国の内政など、いきなり来ても分からないでしょう？」

『春斗、任せるからきつちりやりなさい』と目で働きかける華琳様に、ため息をつくことぐらいいは許されると思う。

全く、仕官してまだ一月も経っていない人間に、そんな大役を……。

「では、改めまして。魯肅、字を子敬、真名を琴音と申します。これよりよろしくお願いいたしますね、春斗様」

「同じく、改めまして。糜竺、字を子仲、真名を縁と申しますわ。朝餉から夜の御伴まで、なんでもご相談くださいませ」

史実でも優秀な二人を部下に持つことになってしまったわけだが、この二人に習うことで更に文官としての知識を高めることも出来るだろう。桂花に軍略を習い、早く一人前になりたいところだが、それは陳留に帰還してからになりそうだ。

……糜竺さんの言葉は取り敢えず流すことにしよう。危険すぎる。

「姓は陸、名は遜、字は伯言、真名は穩って言います」。気軽に穩ってお呼び下さいね、春斗様」？」

やけに間延びする声と共に、残された最後の女性が頭を下げる。呉を支えた軍師の一人で、後の大都督となる人物が、そこにいた。

優秀すぎる人材がお手伝いさんだと、逆に心労が溜まりそうな気がするのだが……。仕方あるまい。後で、胃薬を注文しておくことしよう。

【黄巾征伐編・第一話】 王佐の才、苦悩の日々の始まり（後書き）

（後書きという名の言い訳）

丸々休みを取れたので、それなりに良いペースで書き上げられた第一話。

パソコンの傍らには梅酒と麦茶を常備して書いているわけですが。

ということ、こんばんは。アルムエルソでございます。

第一話からいきなりの展開ですが、徐州三人衆（陳登、王朗、朱治）の三人は陶謙軍の重鎮となります。同盟締結によって、陶謙軍に連れられた春斗。

陶謙軍で活躍することは出来るのでしょうか。

琴音こと魯肅といえば、「魯家に、気違いの息子が生まれた」とまで言われた人物ですが、在野時代には財産を投げ打って人々を助けるべく尽力した人物ですね。

春斗の下に来たのは、民の為になるというのが一番の理由です。これを機に、陳留を中心に慕われる人物になることでしょう。

縁こと糜竺といえば、裕福な家庭に育った人物で、史実だと劉備軍の一員として活躍した誠実で義に篤い人物というイメージがあります。

ここでは、魯肅との親交の深いという設定であり、徐州を代表する二大商家の一派として有名なのです。

勿論、史実では魯肅も糜竺も、商人ではないですが。

穩こと陸遜は、桂花、華琳、春蘭、秋蘭に次いで五人目の恋姫キアラですね。実は季衣は華琳の軍門にいるので、六番目に加入した人物ということになります。

廬江の太守であった陸康によつて、袁術軍に攻められた際に逃げ出すことになる陸遜は、本来では呉郡に逃げることになるのですが、ここでは親交のあつた魯家に助けられています。

将来的に魏とはぶつかることになるであろう軍は、蜀か呉か、それともそれ以外の勢力となるのか。蜀と呉は互いに躍進の切欠を奪われそうですけれども。

今回は、黄巾の乱の討伐の開始となります。

……黄巾軍にも、きっと首魁以外にも女性がいたと思つんです、ええ。

それでは、また次回におあいいたしましょうか。

【黄巾征伐編・第二話】 黄巾の仕官と真の黄巾党 + 書庫の攻防戦

【黄巾征伐編・第二話】 黄巾の仕官と真の黄巾党 + 書庫の攻防戦

―御厨春斗―

陶謙・曹操同盟より一ヶ月。黄巾を頭に巻いた賊徒が各国に出現しているとのことで、街の警邏や内政で領内を移動するときには、軍師などの戦う力を持たない人間は護衛として將軍や武官を連れて歩くようになっていた。

街の中を歩く場合には護衛を引き連れなくても大丈夫なまでに治安はあるが、街の外となると話は別なのだ

「琴音と縁は街の外の集落を周って下？周辺の農業の実態調査を。護衛に風玲、頼むぞ」

「分かりました。言われたとおりに肥料用の糧食を集めてありますので、農民に分けて参りますわ」

陶謙殿によつて、ここ下？の太守を任せられることになったので、華琳様の期待通りに、陶謙殿のお眼鏡に適うような政治を行わなければならない。

まず手を付けたのは人事を潤すことである。ここ徐州の人材は優秀な者が多いので、一人一人を廻って登用を進めることにした。

直ぐに登用に応じてくれたのは、臧覇、孫乾、太史慈の3人だった。呂岱、張昭の2名は今後の政治次第として、答えは保留とされてしまった。断られないだけでも良しとするしかないだろう。

陳留では、一刀が楽進、李典、于禁の三人を副官として雇ったら

しいし、陳留の陣容も豪華になってきているとのことだった。

「私は穏と共に街の広場へ。何でも、大規模な歌会があるらしいからその様子を見てくることにする。念のため、雲里に着いてきて貰う事にする」

「はあゝい、わかりました」

「了解した、ご主人」

風玲こと臧覇と、雲里こと太史慈の二人は、陶謙軍の他の武官に比べても優秀な人材である。立場上は私の部下となっているので、曹操軍所属ということになる。

陶謙殿に都市を任されることになるとは思わなかったが、今の私が太守という事実は変わらない。下？が将来的に我が軍の統治下になるかは分からないものの、きっちりと責任は果たす必要があるだろう。

「未音は城に残って、文官の持ってきた資料の精査を頼む。ここ、下？の詳細な情報を提出してもらっている。去年の情報と照らし合わせて妙なところはないかを確認して欲しい」

「お兄ちゃんの頼みなら、断われないですねー」

未音こと孫乾は、私が雇っている文官武官の中で最年少である。外見や言葉遣いは確かに幼いのだが、彼女の政務能力は琴音、縁に次いでこの陣営で三番目なのだ。

その能力を見込んで、彼女には城の留守を預けることが多い。

「それでは、各位の頑張りに期待する。夕飯は城の食堂でとること

になっているから、夕食前にはここに戻ってくるように。では、解散！」

そういうわけで、下？の中央広場にやってきたのだが、これがまた随分な盛況ぶりだことで。天和、地和、人和という三人組アイドルらしいのだが、この時代にこんなアイドルじみたものは無かったはずだ……。

「あー、あなたがここの歌会の責任者か？」

「いえ、私達は天和様達の護衛でして、人和様が責任者のはずです。何か御用でしょうか？」

「下？太守、御厨春斗と言う。こちらは、文官の陸遜。今回の歌会について、相談があつてここに参ったのだが」

「そうでしたか。私は程遠志、こちらは韓仲と申します。ただ今、人和様に事情を話しておりますので、少々お待ちください」

アイドル達の天幕を守るように立っている二名は、どちらも黄巾の乱で名前が出てくる武将二名だった。現在、件の三人組アイドルは休憩時間に入っているらしく、周囲がまだ熱気で湧いているものの、運良く天幕にいたようだ。

「人和様がお会いになるそうですよ。どうぞ、天幕にお入りください」

「春斗様？ どうしてそんなに緊張しているんですか？ 相手はただの旅芸人ですよ？」

「……これから会う人物が、もしかすると黄巾の首魁かもしれないからだ」

「黄巾の首魁ですか？」 旅芸人にそこまでの求心力があるとは思えませんが？」

「張角、張宝、張梁の三人だとしたら、非常に怪しいことになるが……。とりあえず、会ってみないことには判断ができないな」

私が『天の御遣い』の片割れだと言うことは、まだ元々魏……というか華琳様の下にいた人間だけだから、私が未来のことを知っているということなど露と知らないのだった。

なるほど、普通の人間にしてみれば、旅芸人が賊の首魁とは思わないだろうな。

天幕に通されてみれば、なるほど……女性らしい部屋、でいいのかは分からないが、女性らしい天幕の内部だった。

「本当なら私達からお伺いするところなのですが、わざわざご足労いただいてしまったようで……申し訳ありません。私は三女の張梁と申します」

「……ふむ、あなた方が巷で話題の三姉妹か。下？には娯楽らしい娯楽もなく、住人にとっても素晴らしい空間となること請け合いです。よろしければ、下？に滞在していただきたいところだが」

「そう言われましても、私達は旅芸人ですから……。そう長く、同じ都市に留まるよりは色々な都市を廻ってみたいのです」

そう言われることは想像していた。しかし、旅芸人ともなれば大

陸中を旅しながら様々な都市で様々な出会いを繰り返すことが目的とも言われる。それとも、大陸を歌で制覇したいと言う目標もあるのかもしれないが。

「……黄巾党という集団が、近頃活発に活動していると聞く。そのほとぼりが冷めるまでもいいのだが、お願いできないか？」

「……それは承知していますが。それは旅を続けない理由にはなりません。傭兵でも雇って次の都市に行く予定ですので」

「……そう言えば、ここらの黄巾から得た情報だと、その首魁を張角というらしい。このまま行くと、張角、張宝……そして張梁の三人は中央に手配されるだろう。中央のいざこざに巻き込まれないために、損にはならないと思うが」

横で穩が『どうして三姉妹にそこまでこだわるんですか？』と耳打ちしてくるものの、それにはまだ答えられない。張梁を見ただけだから、まだ本当の首魁かは分からないが、恐らく、無理やり首魁に祭り上げられる運命にあるのではないだろうか。

「……どこまでご存知なのですか？ 一介の太守に得られる情報とはとても思えないのですが」

「……人払いをお願いできるか。ここには、私と穩、君たち三姉妹。外に、護衛として雲里と……程遠志さんと韓仲さん。それ以外の人間を払っていただければ、きちんとお話しよう」

「……その言葉、信用します。私達が藁にもすがりたいのは変わりませんから」

「それと、君とそのお姉さんたちに、『自然体でかまわない』と伝えて欲しい」

「御主人の身に何かあつては困るが……、表の二人がどうこう出来とは思えないか。一応、護身の武器は用意しておいて欲しいのだが……」

穩が「本当に黄巾の首魁、なんですか？」と、少し尊敬の混じった視線で見ているのには、少しばかり罪悪感もあるが。とは言え、将来的に張三姉妹を味方に引き入れることはプラスに働くことだろう。

その一方で、雲里は小言が多いものの、私のことと穩のことも信用しているのか、その命令には従ってくれた。

張角、張宝、張梁となれば、その統率力だけでなく妖術の類も含めて期待できる人材となるだろう。それがアイドルともなれば、兵の士気も上がるのではないだろうか。

それに、張三姉妹の本音にぶつかからない限り、信用できるかも分からないと言つのもある。

「姉さんたちを連れてきたわ。天和姉さん、ちい姉さん、この人が下？の太守、御厨春斗様、こちらはその側近の陸遜様よ」

「どうも、下？の太守の御厨春斗だ。まず、君達三姉妹がこちらの黄巾の長・波才の言う張角、張宝、張梁ということで間違いは無いだろうか」

「……そうよ。何か文句でもあるわけ？」

「ちょっと、ちい姉さん！」

青い髪の少女は、ちいと言つらしい。言葉的に「地」という字を書くのだから、彼女が史実で地公將軍として名高い張宝なのだろう。妹と違つて直情的なところがあるのだろうか。

「気にしないで構わないぞ、張梁さん。張宝さん、逆に質問で返すが、君達は黄巾の首魁……つまり、賊徒の頭か。それとも、彼らの崇拜する偶像か、どちらだろうか」

「春斗様、そんなことを聞いてどうするんですか？ 黄巾の首魁なら、捕らえて連行した方が」

「穩、それは目先の利益にしかないだろう。それに、彼女達が本当に賊徒の頭に見えるか？」

勿論、穩の懸念が分からないわけでもない。黄巾の首魁を捕らえた褒章ともなれば、それなりのものがもらえることだろう。しかし、今の漢王朝のことを考えると褒章よりは人材の方が利益になること請け合いだ。

「私達は、ただ歌つてるだけよ。それを扇動し始めた一部の人間に、首魁に祭り上げられた。実は、波才や張曼成などには追われてる所だったのだけど、ここら辺だと下？は統治、警備の面でも安全だと思つて逃げ込んだところよ」

「……なるほど。それなら、暫くの間下？に駐留すると良い。宿舎には下？城を、また歌会などについては下？の総力を挙げて支援することを約束しよう」

「春斗様！？ それ、正気なんですか？」

思った通りというか、彼女達も黄巾の被害者と言うことなのだろう。後は、首魁は張角、張宝、張梁という誤った情報を訂正させるだけなのだが、そこはなかなか難しいだろう。

とはいえ、こちらには未来の知識と言う強みがある。最低限、彼女達三人をこちらの陣営に引き抜ければ、後はどうともなりそうだ。

「その提案は嬉しいけれど、そちらの目的は？」

「こちらとしても得の無い提案を持ち掛けたりはしないさ。その代わりとして、下？の民のため、娯楽の提供。それと、武官の士気向上を頼みたい。立場としては、私の配下ということになるが……」

「こちらの不利にはならないってことね……。天和姉さん、ちい姉さん、それでいい？」

「好きなところに行けないのは……。不満だけど。それで好きに歌えるって言うのなら我慢するわ」

「お姉ちゃんは、難しい話は良く分からないから……。人和ちゃんに任せるよ」

これで、契約は成立といったところだろう。これで、残りの黄巾の首魁として賊を率いている頭を潰すだけだ。後は、大方張角、張宝、張梁の三人の顔を知らない官軍に、別の首魁を渡すか……。それとも本当の首魁の情報を都に流すか……。

「春斗様、本当にいいんですか？ 利益もありますけれど、不利益の方が多くはありませんか？」

「穩、問題ならないぞ。それと、先に城に帰って、華琳様に連絡を取っておいてくれ」

「春斗様がそこまで言うのなら、その方向で話を進めておきます」

穩を先に返して、華琳様に今日のことを報告しておく。当然ながら、彼女達が黄巾の首魁と言う情報は、まだ伝えない。伝えたいことがあるので、下？城にいらして欲しいとの旨を伝令に混ぜるようにしておくこととする。

「それで……、春斗様はどうして私達の正体などを知っていたのですか？」

「……華琳、曹操軍には天の御遣いが二人いるんだ。一人は陳留にいる北郷一刀、もう一人が私なんだよ。君達のことを知っているのは、天の御遣いは、未来の知識を持っているから、というのが理由だ」

「御遣い様……本当にいたんだね。お姉ちゃん、そんな人に会えるなんて感動かも……。ねえ、春斗さん。私のことは、天和って呼んでね？」

「ちよつと、お姉ちゃん!？」

「私も信頼の証として真名を授けることにするわ。私のことも、人和って呼んでもらっていい？」

「ちよつ、人和まで!？」

張三姉妹を味方に着けることで、華琳様の躍進は益々早まることだろう。問題は、この後には董卓に対する連合が組まれることだが、その際にどのように立ち回れるのか。

そして、その連合までの間に、どれだけ力をつけ、周りの諸侯を味方に引き入れられるか、といったところだ。

「もう……お姉ちゃんも人和も……！ 良いわ、私のことも地和って呼んでいいから、信頼は裏切らないようにしなさいよ！」

かくして、陶謙軍の都市・下？は一段と騒がしくなっていく。ただでさえ騒がしかった下？城だが、そこにアイドルユニットが加わったことで、街の中も城の中も喧しくなる。とはいえ、私は凡才ではあるものの、他の面々が優秀だというのだから、それでいいだろう。華琳様の下、平和な国を作り上げることが出来れば、それでいいというものだ。

〈拠点・穩 / 書庫の攻防戦〉

下？の城には、それなりに広大な書庫が存在する。最近まで政務に追われて忙しく、文官が何人か書庫に入ったことがあるぐらいである。本当なら、もっと早くに書庫を訪れておきたかったのだが、今日の今日までずれ込んでしまったというところだ。

「あつ、春斗様。今は書庫にはお入りにならないほうがよろしいかと……」

書庫に入ろうとしたところ、部屋の前にいた琴音に止められてしまった。書庫の中に何か問題があるのだろうか……。

「書庫で何か問題でも起きているのか？」

「いえ、そういうわけではないのですが……」

なんとも歯切れの悪い回答をよこしてきた琴音。とはいえ、特に問題が無いと言うのなら、折角休みなのだから書庫で有意義に過ごすところなのだが……。

「んっ……、んあっ……」

琴音の静止を振り切って書庫の中に入ってみると、何か変な声が聞こえたわけだが……。とはいえ、知らない相手の声でもなさそう。様子は少し変ではあったものの、この声は間違いなく穩のものだろう。

賊か何かが侵入しているわけではないのであれば、そこまで心配する必要は無いだろう。琴音の静止の意味は少し気になるが、必要以上に気にかけても仕方ない。

「穩、何か問題でもあったのか？」

「んあっ、あう……！？ 春斗さん、こっ、来ないで下さいっ！」

妙な声をあげている穩を心配して声をかけて見せるが、返ってきた答えは来ないで欲しいとの答えだけだった。いったいどうしたと言っのだろうか。

「穩……？ 何か問題でもあったのか？」

「何も無いですっ！ 何でも無いですから、まだ来ちゃ駄目ですっ！」

「しかし、そんなこと言われても……。危険じゃないかだけ確認させてもらってもいいだろうか」

「駄目〜！ 駄目なんです〜！ 今は駄目なんですってば〜！」

駄目といわれても、尋常じゃないほどの悲鳴を上げられれば、確認をしなければいけないだろう。ここ、下？は預けられているとは言え、私達の居城となっている場所だ。危険性があると言うのなら、確認をしないわけにはいかないだろう。

「穏、無事……なん……だな？」

「だ〜から〜、駄目だつて言っただじゃないですか〜！」

「これは……、その……すまん！」

書庫の奥、部屋のどこから見ても死角になるその場所に、確かに穏はいたのだが……問題はその穏の格好だった。普段から露出の激しい格好をしているのだが、今日はその格好を更に肌蹴させていたのだ。というか、どう考えても自分で脱いだような気がするんだが。

「春斗様、だから今は入らないほうがよろしいと申し上げたのです……」

「琴音様〜、どうして無理やりにも春斗様を止めてくれなかったんですか〜！ これでは、お嫁には行けなくなってしまうじゃないですか〜！」

「いや、まさかそのような性癖だとは思わなかった……、というか

普通は考えもしないだろうが……」

後ろから、琴音が『見てしまったのですね……』とばかりに、大きな溜息を一つ吐く。普段なら書庫に入れないことにしているらしいのだが、今日はどうしても穩がここを訪れなければいけなかったらしい。というか、それには納得だ。

こんな性癖だったとしたら、下手に書庫に入れるのは良くない事だろう。

「その……、穩はこういった困った性癖でして……」

「大丈夫だ、見れば分かる。……イヤでも分かる」

私や琴音が来たことで、少しばかり自重の念が働いているようではあるが、それでも身体をくねくねさせながら、どうにも何かに欲情しているような穩を見れば、否が応でも感じ取れる。どんなに鈍感な人間であつても気づくことだろう。

「申し訳ありません、春斗様。……穩には、今後の書庫への侵入を禁止いたしますので……」

「そつ、そんなあゝ！ 琴音様、そんな殺生なゝ！」

この世に絶望したような表情で、愕然として肩を落とす穩。よっぽど本が好きなのであろう。そこまで本が好きというか、異常な愛情を注いでいる彼女にとって見れば、一生本を読めないと言う環境は、死んだも同然と言うことなのだろう。

「いや、そこまでしなくても良い。ただ、穩を書庫に入れるときは、『危険立ち入り禁止』とでも書いた看板をぶら下げておけばいいだ

ろっ」

「了解いたしました。ほら、穩も淫らな格好を見せてしまったのだから、何か言うことがあるでしょう？」

「春斗様あゝ、責任を取ってもらってもいいですか？ もうお嫁にいけないようになってしまったので」

「こら、穩！」

琴音が謝罪を促しているにもかかわらず、穩はいつでもマイペースなのである。とは言え、穩の言うことも分からなくは無いだろ。いくら仮初の上司とは言え、男にあんな姿を見られては、誰だって同じことを考えるだろう。お嫁に行けなくなったといわれては、申し訳が立たない。

「責任は取ってやりたいところだが……、もう少し時間を置いてからだ。穩の気持ちが変わらないのなら、責任でも何でも取ってやる」

「ほっ、本当ですね？ 後から嘘と言っても駄目なんですからね？」

「取り敢えず、それは置いておくとして……。穩、兵法を学ぶ上でお勧めの本を教えてください」

琴音としては、穩の要求が通ると思っていなかったのか、驚いているようだ。が、少しすると復活して、『……春斗様が、そう仰るのなら……』と、少し苦い顔で言ってきた。

なるほど、確かにぽつと出の男に、妹分に近い穩を持って行かれ

るのは心苦しいということだろう。どちらにしても、穩が私のような人間に惹かれる訳がないだろう。

「はあゝい。それでは、ご案内しますねゝ？ それと、よろしければ、私が教えて差し上げてもいいですよゝ？」

「本当か？ それなら、是非頼むとしようか。穩ほどの優秀な軍師に教えを乞うことが出来るとは光栄だ」

「春斗様っ！？ それは、お止めになられたほうが……！」

今日は本の場所を案内してもらい、その本を自室に持っていくだけで済んだわけなのだが、後に、琴音の言った言葉の真意を知って、その忠告を受け入れておくべきだったと後悔するのは、また別の話である。

―後書きと言う名の土下座―

と言うわけで、無事に第二話を迎えることが出来ました。徐州の下？を任されることになった春斗ですが、下？はもともとそれなりの仁政が行われており、そこに春斗提案の未来の知識フル活用で、それなりの治安が守られている地域です。

そして、今回で下？にいたる春斗陣営の面子が一気に豪華になっていきますね。正直なところ、これだけの人材が入れば、この時点で曹操や孫堅などの陣営よりも人材的には上泣きがしないでもない。とは言え、曹操の一派であるわけなのですが。

それと同時に、拠点フェイスを挿入しております。今後も、こうやって拠点フェイスを挟んでいきますので、このキャラの拠点フェイスが見たいと言うのがありましたら、お申し付けください。参考にさせていただくことも多数あると思いますので。

それでは、また次回にお会いできることをお祈りします。

【黄巾征伐編・第三話】 江東の虎・亡国の狐、現る

「黄巾征伐に出ていた孫家の長が戦死……。孫家は、孫堅に代わって孫策が継ぐことになった、か……」

「孫堅殿といえ、ここ徐州にもその武名は届いておりましたね。賊征伐にも精力的に参加し、民にも気さくに接していたとのことですね。……惜しい方を亡くしましたね」

この時代で孫堅が死ぬと言うのは、あまりにも予想できていなかった事実である。孫堅、孫策ともに、その性急過ぎる性格で、命を落としかねないと言う評価もある人物ではあるものの、ここまで早くに命を失うことになるとは、誰も予想できていなかったことであろう。正直なところ、出来ることならば孫堅殿にはお会いしてみたい所だった。

と言うよりも、華琳様の癖がうつってしまったのか、どうにも人材至上主義みたいになっている気がする。確かに、黄巾の乱を起こした三人に呉を支えた重鎮、蜀の優秀な文官を揃えている時点から、少しずつ人材を気にするようになっていたのだ。

「春斗さん、官軍の人達が会いたって言うけど、どうする？」

「官軍ともなれば、お会いするしかありませんね。大方、この黄巾の征伐……即ち波才軍打倒の為の協力要請かと思いますが」

「心配は要らない、御主君。御主君に危険が及ぶ前に私が一刀してくれる」

「その通りです。私と雲里なら、並の武將に負けることはございません！」

雲里と風玲の言う通り、今のこの陣営ならば、並大抵の陣営に遅れを取るということは無いだろう。それが、一つの陣営であるのならば。

しかし、それは相手の陣営が増えればそうとも言えなくなる。ここで官軍にでも目を付けられれば、一気に私の陣営は窮地に陥るだろう。

それだけは、避ける必要がある。下手に出てでも、ここは穩便に過ごす必要があるだろう。

「董卓様より、言伝に参りました。私は董卓軍の軍師の一人、名を李儒、字は文優なのです」

「同じく、董卓様の遣いで参りました。我が名は徐栄、今回はお会いしていただいたことに、感謝の意を申し上げます」

「そうでしたか。ここ、下？の太守を務めております御厨春斗と申します。本日は、お会いできて、光栄に存じます」

「そこまで畏まられなくても大丈夫です。今回、我等がここに参つたのは徐州の黄巾軍への攻撃のため、協力することに当たりたいと思うのですが……、って闇香！？ 他の陣営の人に何をしているかつ！？」

黄巾を討つ為に協力して事に当たろうという提案を掲げてきた董卓軍の面子であつたが、徐栄が素つ頓狂な声をあげたため、董卓軍・我が陣営問わずにその惨状を見ることになった。

とは言え、李儒と名乗った少女が、妙な行動に出ていることを見

ることが出来ただけであるのだが、その行動と言つのが理解の範疇を超えていたのである。

「あー、このお尻の感触……溜まりませんねえ……」

「あつ、あのっ！？ お止めください！？」

「この柔らかさ……、この温もり……。恋様とはまた別の心地よさが……、いえやはり月様の方が……しかし詠様のも捨てがたい……」

李儒の特異な行動と言つのは何かと言えば、琴音のお尻に顔を埋めて恍惚としていると言つことだった。恋、月、詠という三人に関しては誰のことかよく分からないものの、恐らく董卓、呂布、張遼、華雄といった董卓軍の重鎮と言つことだろう。李儒が董卓軍の軍師である以上、その人物が敬語をつける人物と言つのは限られてくる……というか、彼女達も女性なのか？

「闇香！ この変態軍師が……、ご無礼をお許しくだされ」

「そんなことはどうでもいいですから！ だから、この人をお尻から放してください！」

琴音のお尻に顔を擦り付け続ける李儒に、『いつもこんな感じなのです、面目ない』と呟きながら、無理やり李儒を琴音から放していく。

この李儒という少女。史実だと真つ黒な感じの軍師なのだが、この愛らしい少女からはそんなことを感じることもすら出来ない。

一言で言おう。幼女である。以前お会いした胤といい勝負であるう。それこそ、軍師と言うよりもあわあわと右往左往している街中の少女に見えるほどののだが……、この年齢でその性癖……将来が

心配になる。

「……春斗殿、閻香はそれでも18を越えていますよ?」

「なんですとつ!？」

読心された事に関しても驚くが、それ以上に李儒が18以上という事実に驚く。……成長期が来なかったと言うことにしよう。

……まさか、胤も18を越えているのだろうか。

つて、そっちが本題ではなかったな。本題は徐州を根城としている黄巾の掃討の件であった。ここまで来てもらった以上、無碍には扱えないことは分かっている。

「……話を戻しましょう。黄巾討伐のために力を合わせる、と言うことでよろしいでしょうか?」

「え、ええ……。既に、黄巾党による被害は看過できないものとなってますからな。孫堅殿の話は、既にお耳に入っていると思われるますが?」

「そうでしたね……。それに、幾らお互いの軍が強力なものであつたとしても、被害は協力したほうが少なく収まりますからね」

黄巾の乱を治めるために官軍が派遣されたとはいえ、董卓の引き連れてきた兵士は、間違いなく董卓自身の軍である。私の軍にしてもそうだが、出来る限り兵の損害や将の損害を抑える必要があるわけである。

それならば、協力してことに当たるということ事態に問題は無い。寧ろ、軍備が余り整っていない我が陣営にしてみれば、願ったり適ったりである。

「さて、どう考える？」

一応陣営のトップに立っているとは言え、まだまだ若輩者の私である。そこは、軍師というか頼れる文官仲間に意見を求めてみることにする。

正直、私などよりも断然優秀な彼女達の言葉を聞いておくのは非常に重要なことである。

私の問いかけに、彼女達は少しだけ考えて答えを口にする。

「軍としては賛成です。……個人的にはあまり賛成ではありませんが、そちらは諦めます」

「私も賛成ですわ。人が増えると、それだけ面白くなりそうですし」

「私も、この案を呑んだ方が得だと思いますよ？」

「今の段階で官軍と関係を持つことは、今後を考えればお兄ちゃんの得になるのですよ」

「私も賛成。官軍に功を見せ付けることで名声を得ることも出来るかもしれないわ」

この陣営で文官業務、軍師として名を連ねる五人の意見は、どれも賛成と言うものだった。傍目で風玲と雲里にも目を配ってみたところ、コクンと頷いてきた。

ここには天和と地和はいないが、彼女達はこちらで出した結論に反対はしないだろう。

私自身の考えもそうであるが、なにより、琴音・縁・穩・朱音・人和の五人がそろいもそろって賛成なのだ。反論の余地が無いと言

うものである。

「徐栄殿、その提案を受けましょう。今後は我等は同士、よろしく頼みます」

「それは助かります。後続隊として、董卓様、賈馱様、呂布様、張遼様、華雄様。並びに、陳宮、高順、李確、張繡が合流することになっていきます。それまで、我等も下？に留まらせていただきます」

「随分と大所帯で来たものね。官軍も本氣つてことかしら？」

「ええ、何進將軍が『さつさと平定してこい』と言われるものですからね。ああ、早く月様たちはいらさないでしょうか。お尻が恋しいのです……」

董卓軍の精鋭ともいえる面子がここへの援軍で来ているらしい。ここまでの精鋭揃いともなれば、相手が黄巾ということのを抜きにしても大体の相手ぐらいなら楽に平定できることだろう。

……黄巾駆逐時には、それなりに大規模な宴を開く必要があるかもしれないな。何せ、董卓だ。史実の酒池肉林のイメージが強いのだが、どういった人なのだろうか。

まあ、考えていても仕方ないか。取り敢えず、李儒さんと徐栄さんには城の一部屋を宛がって別の案件について協議することとする。

「……救援要請か。場所は、ここから少し離れた村だったな」

「そうなのですが……、ここは派遣するメンバーを考える必要がありますね。武官・文官を一人ずつと張三姉妹の一人、それと医術の心得がある人物も一人必要でしょう」

なんでもその村は、度重なる黄巾党からの攻撃にも耐え切っているらしい。どうやら知に富んだ人物がいるのか、策を用いて何度か連中を追い払っているが、村人の怪我人の率が高いらしい。早めに村の周りの黄巾を駆逐して、村人の治療を行う必要があるとの琴だったのだ。

「医術に関しては、私もそこそこ心得ならある。後は、穩と雲里、それと地和に付いてきてもらう。既に展開している魅亜の部隊と合流して村を目指そう」

「御意。陶謙様への遣いはいかがなさいますか、御主君」

「そちらには韻を充てよう。琴音と縁は、董卓軍が合流したら機を見て村の周りの黄巾を掃討してほしい」

「はっ！ 必ずや、掃討して見せましょう」

元々、天和達の護衛をしていた、魅亜こと程遠志と韻こと韓仲は、どちらも文武両道という、なかなかの才であった。我が陣営では数の少ない武官としても活躍する一方、きちんと文官仕事までこなしてくれる優秀な人材である。

故に、勢力として数えるのもおこがましいほどの弱小な陣営ながらも、その将の層の厚さだけを見れば、他の勢力にも引けをとらないのだ。

「それでは、作戦開始だ！」

私の初陣は、黄巾の掃討戦と言うことになった。幾ら私が、こと戦に関しては無知だったとしても負けるような戦ではないだろう。

最低限、村の民にも、将の中でも怪我や命を失うような者が出な

いように、それだけを考えて動かざるを得ないだろう。

人の上に立つのだ。その決意を持たなくては、私を信用してくれる者に、顔を向けられない。そう思いながら、私は初陣への不安をなんとかして取り払おうとするのだった。

―徐州・下相県―

黄巾の襲来に対して、未だ持ちこたえている小さな村が、下相県の中にあつた。村の人口は元々そこまで多いわけではなかったが、ある意味でその村には天が味方をしていたのかもしれない。

「璃燐さん、北門付近の準備は整いました」

「璃燐、同じく南門付近の準備も整ってるわ」

「いくら相手の軍の方が人数が多くても、一度に戦える人数を減らしてしまえば、怖くは無いのです。その場合、琉流と朱蓮様に命運を託すことになってしまいましたが……わわわっ！？ いきなり頭を撫でないで下さい！」

「いやいや、私の娘もこれぐらい可憐だったら可愛いものを……」

その村に天が味方をしていると考えるのも、当然のことといえた。村人の中では一番腕が立つ少女、その真名を琉流というのだが、彼女こそ、現在では名の知れた曹操の親衛隊の一人、典韋なのである。しかし、いくらそれだけ強い将が一人だけいても勝ち目は無い。そこに、怪我をしていた朱蓮が通じかかったのだ。既に怪我は完治しているものの、この村がなければその女性も命は無かったであろう。

そして、その命を救われた女性こそ、孫策・孫権の母親である孫

堅であつた。類まれなる指揮能力を持つ孫堅を招きいれられたことも、天命だつたのであろうか。

しかし、幸運はそこで終わらなかつたのだ。旅をしている最中であつた三姉妹が、この村にいたのである。その少女達の内、特に次女の才能は凄かつた。襲い来る黄巾を、その策でことごとく破つて見せたのである。

普段は、今現在朱蓮に頭を撫でられて萎縮してしまっている、愛らしい少女なのであるが、その軍略だけを取ってみれば、蜀の諸葛亮、呉の周瑜にも匹敵することであらう。

それだけの人材が、今村にすることが、何よりも天命であつた。

そして、下？を治める人物が、天の知識を持つ、もう一人の天の御遣いであつたことも、さては天命だつたのであろうか。

「朱里ちゃんは、主を見つけたみたいだけど……朱里ちゃんには負けないんだから！」

「んー、やはり可愛いわね。あー、愛くるしいわ……」

稀代の軍師、諸葛亮の最高のライバルにして友人であるその人物。後に、魏を支える重鎮ともなる人物。彼女こそが、司馬仲達その人であつた。

司馬懿という少女、孫堅という女性、典韋という少女。三人とも一人の天の御遣いとの邂逅が、刻一刻と迫っていたのである。

「璃羅お姉ちゃん、早く戻ろうよー！」

「璃瑠、考えてみなさい？ 私達も、失敗するわけには行かないのよ？」

「でっ、でも……。ここまで出てきたら囲まれちゃうよ?」

その一方で、司馬姉妹の長女と三女は、村の外れにいた。

村の外れでは、黄巾の強行突破が行われようとしていることも知らずに……。

黄巾党の本隊は、今か今かと下相県全土を多い尽くそうとしていた。それだけ、徐州の黄巾の勢いは強いものであった。その大きな理由は、波才の類まれなる用兵のお蔭である。

とはいえ、彼女の用兵術も天賦の才というわけではなかった。その裏には、とある導師の存在があった。その導師、その名を于吉という。

「波才殿。このまま攻め立てれば、あのような小さな村など直ぐに片付きましょう。注意を払うべきは、司馬懿、孫堅、典韋の三名ぐらいかと」

「ふむ……。于吉殿が言われるのなら間違いも無いでしょう。徐州黄巾党に命じます。我が名の下に、かの村へ総攻撃を仕掛けなさい」

「……恐らく、この村に彼は来るでしょう。波才殿の思惑は、張三姉妹を任せるのに足る人物かを試すためでしょうが、ことはそう簡単なことではなくなってしまいました」

傍らで、金色の髪をたなびかせる波才が、声も高々に兵の鼓舞を開始し、総攻撃を宣言している一方で、于吉は難しい顔をしていた。その顔は、どこか愁いを帯びており、得体の知れない何かに苛まれているようであった。

「北郷、御厨……。もはや、彼らに託さざるを得ない状況ですね。北郷の力は既に経験したことがあります、御厨は別です」

波才率いる黄巾の精鋭が、村の中になだれ込んでいくのを、黄巾の軍師を務める于吉は、余り興味の無い表情で眺めていた。否、彼が考えていたのは目の前の戦いではなかった。いずれ起こるであろう、未曾有の事態。彼が考えていたのは、それだけである。

この場に御厨春斗が、もう一人の天の御遣いが来ることはもはや于吉の中では確定事項である。何より、もうその時が迫っていることを、于吉は確信していた。

「于吉様！ 敵の援軍、下？ 太守・御厨春斗率いる2万の兵が村に入りました！」

「ようやく来ましたか。……御厨春斗、あなたの力と考え方、私に示してもらいましょう。……どうか、失望させないで下さいね？」

伝令に打って出るように伝えると、于吉は眼鏡を指で持ち上げた。その目に映る光は、以前よりも光に満ち溢れているものであり、仄暗い雰囲気はもはや感じることも無い。

自嘲めいた笑みを浮かべると、于吉自身もまた、前線へと身を投じるのだった。

――御厨春斗――

周りを囲んでいる黄巾党の軍勢を、一点突破する様にして村へと軍を進める。途中で女の子を二人を拾ったものの、周りには村人の遺体は何体か転がっている始末だ。

黄巾が賊軍だと侮るわけではないのだが、それでも周囲を取り囲む黄巾党の軍勢の士気の高さ、整然とした隊列などは考えられないほどに優れている。

誰か、黄巾党に優れた軍師や指揮官が付いているのかもしれない。

「璃羅姉さまと、璃瑠を助けていただき感謝いたします。下？城の太守である御厨様ですね？ 私は司馬懿と申しましょっ！？」

「そんなに緊張して話さなくても大丈夫よ。下？の太守、御厨春斗は領民のことを一番に考えていると名高いのだから」

「わわわ……、そっ、そうでしゅね。御厨様、黄巾を打ち破るために、私達の力を役立ててください」

とはいえ、幾ら黄巾の軍勢が強いと入っても、こちらの陣容を考えればそこまで脅威ではないのかもしれない。私以外の面子は、陸遜と太史慈という呉を支えた名将二人に黄巾の指揮官であった張宝と程遠志。それだけではなく、村を守りきるだけの策を考えていたのは孔明のライバルとして名高い司馬懿だという。となれば、その姉は司馬朗、妹は司馬孚といったところだろうか。

「私は典韋です。この度は、わざわざ救援を送っていただき、感謝の言葉もあります」

「私は孫堅よ。本当はもう少し南で討伐隊を率いていたんだけど、敗走しちゃってね。ここで助けてもらったお礼を返そうと思ってね？」

「あなたが、孫堅殿でしたか。どうやら、孫策さんが『遺志を継ぐ』との声明をあげていましたが、存命でしたか」

他の二人も、魏の親衛隊に抜擢されるほどの典韋と、死んだと思われるにいた江東の虎こと孫堅とのことだ。これだけの陣営なれば、そうそう負けることなど無いだろう。

「現在、村に通じる道は東と西の二箇所のみです。北と南は、あらかじめ進入路をふさいでいます。ですから、その二箇所を専守防衛で良いかと思えます」

「私もその方針に賛成です。董卓軍の到着を待つて、一気に敵軍を殲滅するのが一番だと思います」

司馬懿と穩の方針に、頷き返そうとした時、もう一つ、聞いたことの無い女性の声が返ってくる。

「私もその方針に賛成って言いたいところだけど、それだけじゃあ抑えられないのよね」

「誰だ！ 御主君に仇なすというのなら、この太史慈が黙ってはいないぞ！」

「やーねえ、私は味方よ、味方。左慈も于吉も信じられないみたいだけど、私は最初からあなたって決めてたの」

「……御主君、どうなさる？」

その女性が姿を見せるものの、誰もその姿に見覚えが無いらしい。黄巾の兵や指揮官と言うわけでもないだろうが、この村の民でもない。黄巾の軍が展開しているこの村に入ってこれるほどの旅人にも見えない。

流れるような長い金色の髪は、それだけでも人の目を引く。しかし、何より頭に生えている獣耳が、異様さを引き立てる。服装だけを見れば、ただの女官に見えないことも無いのだが、これではそんな判断を下せる要素が無い。

……しかし、雲里が警戒をはずせないほどの使い手でもあるらしい。

対処に困るものの……まずは話を聞く必要があるだろうか。

「自己紹介するわね。私は妲己、この時代よりもっと昔の……九尾といえは分かるかしら？」

「殷の一件で有名な……か？」

「そう、その認識で間違いないわ。現在の黄巾には、于吉がいる。あの男を抑えるには、私みたいな存在が必要ってわけよ、ご主人様？」

「貴様みたいな怪しい輩に、御主君を主と仰ぐ資格など無い！」

「あんたには答えを聞いていないわ。私が聞いているのは、私のご主人様になる素質のあるこの方だけよ！」

妲己の登場で、雲里との間に不穏な空気が漂う。その目を見る限りだと、私達を欺こうとしているようには見えないものの、それだけで信用していいような相手ではないだろう。

……とは言え、彼女の言うことが本当だとすれば、妲己を陣営に迎え入れるほうが得策ではあるが……。

「早々信じてくれるわけ無いよね……。良いわ、私の真名は玉藻。私が裏切りそうだと思ったら、今殺してくれても構わない。もしよ

ければ、今回の戦で判断して欲しいんだけど」

「御主君、今すぐに切り捨てるべきです！　こんな怪しい奴に、一軍を担わせるわけには行かないでしょう！」

「……私は、雇うべきだと思いますよ？　確かに、少し怪しいですけど、今はネコの手でも借りたい状況ですよ？」

「ちいとしては、春斗に任せるべきだと思うわ。私達の本質を見抜いて雇うぐらいだから、人を見る目はあると思うし」

見事に三つに分かれてしまった意見を踏まえる必要があるが……結局のところ、私の意見しだいと言うことになるらしい。

……やはり、得体の知れない黄巾への対策を考えると、妲己の存在は不可欠か。

その分だけ危険性も孕む訳ではあるが、利益を考えると仕方の無いことか。

妲己……、いや玉藻の真剣な目を信じるとしよう。

「……玉藻、その働きに期待する」

「御主君、正気ですか！？」

「雲里ちゃん、春斗様の人を見る目を信じるしかありませんよ？」

穏にはそれなりの信頼されているようではあるが、少しばかりの鋭い言葉が入っているのはどういったことなのだろうか。別段、穏に何かしたことは無いのだが……。

そもそも、穏は賛成と言っていたはずなのだが。

そついう意味をこめて穏に視線を送ると、『知りません』とばかり

りに目をそらされた。何が気に入らなかったのかは良く分からないが、取り敢えずこの場はおいておこう。

「了解、ご主人様。于吉は私が必ず食い止めるから、黄巾の本隊を集中して攻めてくれれば大丈夫よ。……余裕があれば、私も援護するわね」

―陣・天幕―

「春斗様の周りに優秀な人材が増えることには異論はないですけど、少し複雑な気分です」

「……全く同感よ、穩」

護衛に孫堅と典韋、魅亜こと程遠志を引き連れて、主である春斗が出て行った後、天幕の中で、陣営の武と知の最高峰、穩と雲里のため息交じりの呟きが、さびしく響いたのだった。

【黄巾征伐編・第三話】 江東の虎・亡国の狐、現る（後書き）

―後書きという名の弁明―

取り敢えず最初に言っておきます。テストやレポートといったいわゆる学期末の影響でなかなか進みませんでした。待っていただいた方には、大変申し訳なく思っています。

ただ、司馬懿・妲己を出したかった、ただそれだけが今回の原動力です。

司馬懿については、ライバルの孔明があれですから、これしかないと思いました。もっと真面目だったり大人っぽかったりも考えましたが、「わわわ軍師」の方向に決定しました。

妲己については、于吉や左慈と同格だと思ってください。設定としては、後の玉藻前と同一人物であり、九尾の狐なので人間ではありません。妖術を中心として戦う術師タイプですが、そこは九尾。某スキマの式並みのスペックをかね揃えています。

孫堅に関しては、原作では登場もしないので、存命ルートにしました。が、呉は孫策が継いでしまったので、呉には立ち場がありません。さて、どうなるか。

波才と于吉率いる黄巾賊にも、まだ隠された強者が存在するかも…。

登場人物が多くなってきた大変だとは思いますが、三国志と言えば猛将などの有名どころだけでも大変な数ですからね。そこをどうするのか、現在検討中です。

それでは、また次回にお会いしましょう。

【黄巾征伐編・第四話】 徐州黄巾党の本気・御厨春斗の本気

【黄巾征伐編・第四話】 徐州黄巾党の本気・御厨春斗の本気

―徐州黄巾党・天幕―

「梅林様、勝つための策も考えてはありますが……今申し上げるのは、違う策のほうがよろしいでしょうか？」

黄巾党の天幕には、複数の将が会議を開いていた。そのうちの一人、翡翠色の髪を短く纏めた利発そうな姿をしている少女が、意見を述べるために挙手をする。

彼女は、于吉と並ぶ黄巾党二大軍師の一人である。

「明里、私が必要としている方の策を聞かせてちょうだい」

「はい。細作の情報によると、下？の軍勢と共に、董卓軍がこちらに侵攻中とのことです。彼、御厨春斗の本気を見るのでしたら、襲うべきはそちらかと」

「私にも異論はありませんね。明里の言っている通り、私達の目的は勝つことではありません。御厨春斗の力と心意気を見るにはそれが一番かと思います」

「兵糧などのことを考えても、今度の戦が最後になります。その点にもご留意いただきますように」

波才のもと、軍議が着々と進められていく。ここに集っているのは、首魁から一兵にいたるまで、同じ目的を持った集団である。そ

れは、賊行為を行うものでもなく、漢に牙を向く集団でもない。

彼らの目的はただ一つ、漢を蝕む狂気から救い出してくれる存在を探すことである。突如現れて、平原を襲っていた謎の軍勢。それに巻き込まれながらも命を生きながらえることが出来たのは、軍師である于吉がいたからである。

闇に飲まれたかのような彼の軍は、この漢のものではない。

「董卓軍及び、下？陣営。並びに、曹操の派遣した救援部隊が既に陣近くに迫っています」

黄巾の諜報部隊が、そのような報告をもたらしたのは、会議の終盤に差し掛かった頃であった。ついにこの時が来たとばかりに、一度息を吐いて命を下す。

「ついにこの時が来ました。御厨春斗の本質を、強さを見抜くために、奮戦を願います。前方は明静、波音に任せます。中衛に空と私が入り、後方から和と明里に援護を頼みます」

「はっ！」

一様に深く礼を行うと、彼女達は持ち場へと戻っていく。

波才の元を集った人物達は、非常に優秀である。春斗側は、思った以上の苦戦を強いられることになるであろう。

黄巾の前衛を務めるのは、徐盛と張燕、中衛には波才と于吉、後方で支援を行うのは張紘と徐庶である。

黄巾とは侮るなかれ、彼女達も、オールスターといってもいいほどの面々であるのだから。

――徐州救援部隊・曹操陣営――

徐州の御厨春斗を救援するために派遣された曹操陣営を率いていたのは、清琳と桂花、それと最近曹操軍に加入していた愁恋こと満寵である。

突然活発化した黄巾党に対して、華琳を筆頭に春蘭や秋蘭、それだけではなく最近将として雇用された、凧、真桜、沙和の三人までフルで動員する必要があったため、陳留には最低限の人材しか置いていない。

陳留で留守番をしているのは、北郷一刀と、同じく最近取り立てられた軍師である風と稟。それ以外の人材は、全員が全員で払っている状態なのである。

そのような状態に陥ってしまうのも仕方が無いことといえば仕方の無いことである。陳留の周辺で名を上げている黄巾党の陣営を率いているのは張曼成という大男で、突如として大所帯の長となった人物であるのだが、その軍としての動きが、完全に曹操陣営の予想以上であつたのである。

既に、南陽郡は張曼成によって占拠され、汝南までもが張曼成によつて落とされている今、陳留を治めている曹操にとっては、動かざるを得ない状態となつてしまっているのだ。

廬江には孫堅を失つた後の孫家、即ち孫策の陣営が入っているものの、この近辺で黄巾に当たっていた劉表、袁術は早々とその勢力を失うことになってしまっていた。

このまま行けば、張曼成によつて曹操、孫策も滅ぼされる可能性があるということだった。それも、忌々しいほどに、誰の脳裏にもよぎるほどには現実味のある事柄である。

そもそも、張曼成だけでも厄介だというのに、徐州は徐州で波才率いる黄巾に追い込まれている現状、下？が落とされるということは、曹操陣営にとつて見れば詰みに等しいのである。

「まだ目的地には着かないのじゃろうか……。妾はもう疲れたのじゃ」

「大丈夫ですよ、お嬢さま。ほら、蜂蜜をあげますから、もう少しの我慢ですよ。」

「その通りです。何、黄巾賊がやって来たら、私が片付けて見せましょう。」

「少しは真面目に仕事をしなさいよ！ 袁術、張勳、紀靈！」

それと同時に、桂花を悩ませる存在が、陣営の中にいた。既に、黄巾によって勢力を失っていた袁術と、その配下である二人である。目的地である下？の村は、既に交戦状態にあることが分かっている。そのような場所に赴くというのに、彼女達は優雅にも蜂蜜を食べている途中であるのだ。それが余裕の表れであるとしても問題であるのだが、何より彼女達には、戦の意識が無いようにも見える。それこそが、桂花のストレスを加速させる原因なのである。

「大丈夫ですよ、荀？様。戦ともなれば、きちんと働きますから。」

「そうですね、荀？様。私と七乃の力に期待していただいていいのですよ。」

「黄巾によって滅亡した勢力の、どこに期待しろというのよ！」

確かに、張勳と紀靈は優秀なことには違いない。違いないのだが、その能力を発揮しないことが問題なのである。存分に力を発揮することが出来れば、曹操の陣営の中でも、そこそこの働きが出来るというにもかかわらず、である。

袁術に関してもそうである。確かに未熟ではあるが、きちんと育

て上げることが出来れば、優秀な人材として曹操陣営の中枢を担えるほどの実力を有する存在に出来る、というのが荀？の評価である。男性以外の人間を見抜く力は非常に優秀である荀？の目を持って、そういわせるほどの人材が、ここまで享樂に耽つて、才を無駄にしようとしていることが、荀？にとつて腹立たしいことでもあつた。

「それで、荀？様？ 私は目的地に着くまで眠つていてもいいですかね？」

「駄目に決まつているでしょう、法正！ 流浪の身であつた貴女を雇つてくれた華琳様への忠誠心があるんだつたら、もう少し真面目に仕事をしてちょうだい！」

「そう言われましてもねえ、だるいことはだるいんですよ。それに、劉焉の旦那の勢力が滅んだ後、仕官する場所は沢山あつたんですよ？」

「それでも、華琳様のところを選んだのだから、少しは真面目にやりなさいよ！」

「私がここを選んだ理由は、一番理想的な職場だからですよ？ 華琳様に、やることをやってもらえれば、休んでもいいって言われているんでね」

「なら、せめて仕事だけはこなさない！」

「はいはい、戦場に着いたらやりますよ。なんで、もう少しの間眠りを妨げないでくれませんか？」

もう一人の厄介な軍師が、こつちの法正であつた。字を孝直とい

うこの軍師は、確かに的確な策を献じる名軍師であるのだが、なによりも、普段の行いがこれである。

桂花は、既にストレス過多で倒れそうなほどの疲れに襲われていた。そこに追い討ちをかけるのが、下？の内情である。

曰く、将は御厨春斗を除いて、女性しか居ないという事実である。確かに、曹操の陣営であつても、男性が将として取り立てられることは少ない。それがよほどの優秀な人材でもない限り、基本的には将になることなどないのである。

「まあ、優秀な人材を集めていけば、当然の帰結なのかしら。劉焉のように、才のない男が将に成つても仕方のないことよね。劉焉なら、内政官程度はできるかもしれないけど」

そのように考えて、無理やり自身を納得させようとする桂花。先の三人以外にも優秀な人材を揃えた分、春斗を怒る資格など無い。共に華琳様を支えていく優秀な人材となるべきものをどうして拒めようか。そのように考えたのは、ある意味では桂花なりの現実逃避であつたのかもしれない。

「桂花様、下？側からの救援部隊を目視いたしました」

「愁恋、そのまま合流するわ。急いで友軍の危機を救うわよ」

「御意に！」

「ほら、法正。目的地よ？」

「はいはい、分かってますよ」

こうして、曹操の軍勢もまた、奇妙な戦に巻き込まれることにな

る。董卓、魯肅、そして荀？。三人が率いている数多くの兵は、下？の小さな村を囲うようにして救援を行った。

それこそが、徐州黄巾党の軍師・徐庶の狙い通りだということにも気が付かずに。

寧ろ、気が付くことなど不可能であつたのかもしれない。黄巾党の軍勢に、自分達よりも切れ者である人材が眠っていたいようとは、誰もが思っていないことなのだから。

――徐州救援部隊・接敵後――

下？から出陣していた魯肅率いる軍団と、董卓率いる軍団が、荀？率いる曹操の軍団と合流して数刻、兵力では黄巾を圧倒していた連合軍であつたのだが、黄巾党による奇襲で、統率が機能しない状態に陥っていた。

しかし、連合軍を混乱の渦に押し込んでいるのは、奇襲だけではなかつたのである。

「ふむ、やはりこちらを狙って正解でしたね。もともと混成の軍隊ですから、混乱の收拾にも時間がかかるのは仕方のないことでしょう」

「ちつ、何者や！」

「私は于吉。本陣が落ちるまで、私と遊んでもらいますよ？」

「……焰、ここは恋と霞に任せる。御厨に援軍の要請を」

「はいっ！ 必ず、援軍をお連れいたしますので！」

董卓軍の本陣前に、突如として現れたのが于吉である。勿論、于吉が一人突然現れただけでは、特殊ではあるものの、ただの奇襲である。しかし、それがただの奇襲ではなかったことが、より混乱を大きくしたのである。

「董卓軍の陣は少々梃子搦りそうですが、こちらなら大丈夫でしょう」

「むっ……、美羽様達は下がられよ。ここは、私がお相手いたそう」

「紀霊殿だけにお任せするわけにも行かないでしょう。ここは、私も加勢致します」

「誰か、妾を助けてたもー！」

「騒いでないで、さっさと私達は下がるわよ！ 清琳と紀霊の邪魔になるわ！」

更に、曹操の陣営にも、于吉が現れたのである。二箇所に現れた于吉の情報は、全軍に流れていき、大きな混乱を生むことになる。それと同時に、やはり魯肅達のところにも于吉は現れたのである。

「さて、あなた方を封じれば向こうへの援軍は阻めますね？向こうは既に徐盛殿や張燕殿が攻め立てている頃でしょう」

「くっ、雲里殿がいなくても、どうにか突破してみせなければ……」

「風玲様、私も加勢致しましょう！」

しかし、呂布や張遼がいる董卓の陣営や、紀霊や曹洪のいる曹操

の陣営と違って、元々武官らしい武官は多くないのが、御厨春斗の陣営である。臧霸や韓仲は、太史慈と比べれば残念ながら劣ると言わざるを得ず、呂布などを止めている于吉に対して、長らく止めていることなどできないのである。それは即ち、突破することは敵わないと言つことを意味する。

「……万事、休すかしらね」

「……せめて、月だけでも逃がさないと」

「……今度こそ、本当に終わりがもしれないわ」

「こればかりは、私も思いも尽きませんでしたねえ」

各陣における軍師の筆頭である、魯肅、賈馱、荀？、法正の言葉が、離れながらにして同じようなニュアンスを含むこととなる。それだけ、連合軍は追い詰められていたのである。

―徐州・下相県・黄巾党―

「敵将・張燕、この孫文台が捕縛したわ！」

「ほら、ちいの為にも、敵将の一人や二人ぐらい捕縛しなさい！」

「ほあああああああ！」

下相県にある、ただの小さな村。後の世で、下相の戦いと呼ばれる歴史上の戦いになるこの地で、徐庶と波才は現状に満足しているとは、とても言えなかった。

と言っても、御厨陣営の戦い方に落胆しているわけではない。于吉側はきちんと仕事をこなしているようだが、黄巾全軍は、苦戦を強いられていたからである。

「劉辟隊が落とし穴に落ち、東門側の攻撃部隊が足止めを食らっております！」

「もう、何で武の役に立たないのに前線に立つのよ！」

「明里ちゃん、素、素が出てるよ？」

「文官なら文官らしく、腰を据えて待つてろっての！」

「明里ちゃんってば！」

思うように動かない戦況に対して、徐庶のストレスも溜まっていた。普段は、妹分の諸葛亮のように、軍師然とした言葉遣いを心がけているのであるが、外見不相応の素の言葉遣いが出てきている辺り、怒りも頂点に達しようとしていた。

「……私の出番？」

「そうね……。朱羅ちゃん、出撃してもらってもいいかな？」

「……うん、お姉ちゃん、頑張るからね……」

「美怨さんにも動いてもらっていいでしょうか？」

「ふふふ、相手の大将を呪えばいいのね？」

「こつ、殺したりしたら駄目ですよ？」

「大丈夫、崇めるべき落星を殺す真似はしないわ、ふふふ……」

徐州黄巾党の軍勢で、今まで殆ど表に出てきていないのが、この二人である。一人は、蜀の名軍師、諸葛孔明の姉である諸葛瑾。もう一人は、劉焉軍滅亡後、徐州黄巾党に身を寄せている、呪術を好んで使う孟達である。

現状、劉辟と張燕が敵に捕縛され、波才は現在、董卓軍から伝令で抜け出そうとしてきた、高順の軍勢と交戦中。

于吉は既に、敵の三つの軍勢の中心で交戦中であり、この場で村を攻めるには、出し惜しみをしていられない状態となったからである。

徐庶が彼女達を使いたくない理由は勿論存在する。それというのも……。

「……黄泉の皆、お客さんだよ？」

「さて、苦しむ様を私に見せてもらいましょうか。ふふふ……」

この二人は、いつもこうだからである。諸葛瑾は、異界の物を呼び出して敵陣を蹂躪する。それ故、被害の面を考えると、余り使いたくないと言うのもある。なにしろ、諸葛瑾は、敵も味方も関係なく蹂躪してしまうからである。味方の損害を考えれば、当然毎回戦場に出すことなどできないのである。

それに対して孟達は、呪いを使うことが多い。以前も戦場に出したところ、村を一つほど呪いで蹂躪してしまったのである。その村の住人は、誰一人として外傷もなく、亡くなっていたそうだ。今回のように、相手を殲滅するのが目的ではない戦の場合、呪殺されては困るのである。

徐庶も、この二人の宣言を聞いて溜息をつくしかなかった。

―徐州・下相県・村落―

張燕と劉辟を捕えてから、突如として村全体を覆う様に、深い霧が出てきてしまった。視界が非常に不明瞭なだけではなく、空気が薄くなっているようにも感じる。敵方の妖術か何かなのだろうか。

「地和。黄巾党には、妖術を使える将がいたのか？」

「太平妖術の書を読んでいるわけでもないし、少なくとも初期の人員では妖術を使える人なんていなかったわ」

「現状では、朱蓮様と琉流ちゃん、程遠志さん呼び戻すしかありません。この妙な霧、どうやら体力を奪っていくみたいですから、できる限り早めに敵大将を討つ必要があるでしょう」

「このままでは、村の民と心中するようなものか……。それに、捕虜の二人にまで影響があるのでは放っておくこともできないだろうしな」

正体不明の霧によって、視界が奪われているだけではなく、どこか息苦しさまで催してくる。困ったことに、今この場にいるのは司馬家三姉妹と私の陣営の穂と雲里である。

頼りになる武官は殆ど前線に立っていて、現状この霧の発生源を突き止め、それを取り除くだけの戦力は存在しないと言える。今は動ける状況になく、残念ながらジリ貧ということだった。

「……見つけた。お姉ちゃんの敵、見つけちゃった……」

「ふふふ、落星の君、絶望に歪んだ顔を私に見せてもらえますか？」

「……御主君、お下がりな。この者たちは危険です」

「黄泉の皆、出番、だよ？」

「ふふふ、落日の呪いを受けなさいな」

霧の中、突然現れた二人の女性。一人は金髪の幼そうな少女、もう一人は青髪の長身の女性である。どちらも、黄巾党の証である黄色の布をつけていることから、黄巾党の将と考えていいのだろう。といっても、何というか、常軌を逸している雰囲気を感じるのだが。

「雲里、これは厳しいんじゃないだろうか？」

「……申し訳ありませんが、それに同意せざるを得ませんね。ですが、ご心配せずとも、我が命に代えても御主君はお守り致しますゆえ」

「春斗様、一応孫堅さん達に撤退命令を出しましょうか？」

「撤退はできないだろう。残念だが、ここを何とか切り抜けるしかないまい。雲里、そちらの青い髪の女性を任せろ。私と穩で、そちらの少女の方を相手するしかないだろう。司馬三姉妹と地和は、巻き込まれないように離れている」

「しかし御主君！ 御主君には武の心得がないのでしょ！ 危険ですから退避を……」

「この村を脱出すれば、外は黄巾党の本隊だ。逃げ場がないのなら、最大限に抵抗するまでだ」

―董卓軍・接敵陣―

呂布と張遼、華雄、張繡、徐栄という、董卓軍の陣営のみならず、この大陸においても優秀な武官に対して、于吉は一步も退かずに応戦していた。

「なんなんや、この導師！ 決定打どころか、傷一つ負わないなんて！」

「……最初から、強いのは分かった。今は、ただ……邪魔をするなら斬るだけ！」

「……武の者として、この壁は超えなくてはならん。負けてなるものか！」

5人の内、既に張繡、徐栄は昏倒して夢の中に旅立っており、残る三人にしても、既に肩で息をしており、体中に擦り傷が目立っていた。一方の于吉はただ涼しい顔で立っているだけである。魯肅、曹操の陣に現れた分身体と違い、この于吉は生身である。それが故に、身体を無防備にするわけにはいかないのである。

「……流石は、董卓軍ですね。しかし、もうタイムアップでしょう」

「たいむあっぷ……？ 何なのだ、それは」

「時間切れ、ということですよ」

そんな于吉の言葉に顔を曇らせる3人。まさか、本陣に戻らせた董卓と賈馱の身に何かあったのか。そうであるのなら、時間切れという言葉にも頷ける。勿論、そのような情報を信じたくはないところであり、3人は于吉から視線を反らさない。

寧ろ、最初に視線を反らしたのは于吉であつた。彼が何か印を切り始めると、3人は生唾を飲み込んで、彼の動向を伺っていた。

そのときのことである。あらん方向から、レーザーが飛んできたのである。

「式輝『狐狸妖怪レーザー』。友人の妖狐から分けてもらったものだけど、結構便利ね、これ」

「……やはり、あなたでしたか。懐かしい気配だと思えば……、彼を主と定めたのですか？」

「ええ、あなたの懸念も分かるけど、ご主人様は優秀よ。それこそ、天の御遣いが揃えば、更に躍進するわ」

「……ふむ、あなたの言葉を疑うわけではありませんが、もう少しだけ見定めさせてもらいましょうか」

「そう、それなら私が相手をするわ、空。あなた達は村へ向かつて、ご主人様を援護してちょうだい。私は妲己、ご主人様のこと、頼んだわ！」

妲己と于吉の、人間を超越した戦いが上空で巻き起こる中、呂布と華雄は村へと急行する。張遼には、本陣の警護を告げ、二人は戦場を駆け抜けていった。

【黄巾征伐編・第四話】

徐州黄巾党の本気・御厨春斗の本気（後書き）

―後書きと言う名の何か―

どうも、お久しぶりでございます。

夏休みが始まると、仕事が忙しくなる界限のため、夏期講習でくたくたです。久方ぶりの休みが取れたため、書き終えての投稿となっています。

それにしても、徐州の黄巾党の面子がチートです。この時代でこれだけの武將がいれば、下手すれば天下を取ることもできるかもしれません。

それと、妲己の裏設定として、某スキマの式神とは旧来の友であるというのも、前から考えていた内容です。実現できてよかったです。

内容が殆どありませんが、それでは又次回に。

【黄巾征伐編・第五話】 暗雲渦巻く洛陽

【黄巾征伐編・第五話】 暗雲渦巻く洛陽

―洛陽―

「朶、無事だったのね！ 都の中も混乱してて、あなたの安否が気になってたのよ」

「何進と、他の十常侍が敵と内通しています。水海様、陳留の曹操殿を頼るのが、今最も安全な方策です」

「……華琳姉様を？ そんなに大変な状態なの？」

「この都には、もはや味方は殆どおらず、周囲の諸侯も内通の可能性すらあります」

「……四面楚歌もいいところね」

洛陽にある、宮廷の一室。将来漢を支える可能性のある少女、その名を劉協という人物の私室である。洛陽の周囲を固める諸侯や、洛陽の中央を牛耳っている大將軍の何進や、他の十常侍、更には漢の内政官の殆どが、未知の敵に内通していると言う事実を掴んだ、十常侍の1人である張讓は、劉協の部屋でそのことを報告していた。未知の敵については、本当に何も分かっていない。しかし、それが漢に仇なす存在であることは張讓だけならず、劉協にも少しばかり理解できていた。

劉協は、その立場上あまり外に出歩けるわけでもなく、入ってくる情報も殆どが制限されている。それ故、張讓の言う「敵」の恐ろ

しさを真の意味で理解しているわけではない。

「既に内通が分かっている諸侯には、潁川の韓馥や并州の丁原が挙げられます。何進の目的が何かまでは把握できてはおりませんが…、帝の擁立を考えているのやも知れません」

「そうなれば……、朕は暗殺される可能性もある……ということかしら？」

「平たく言つとそうなります。しかし、水海様と懇意にされていた曹操殿ならば、そのような心配は要らないでしょう。暗殺などはあのお方の毛嫌いする方法でしょうし、現在は天の御遣いを擁しておられるとか。名声においても、ここ以外の勢力は考えられません」

「……分かつたわ。華琳姉様を頼りましょう。……例え私が疫病神になろうとも、華琳姉様ならこの国を立て直してくれるはずだわ」

「ええ、既に手配は済ませております。……明命、先導を頼みますよ？」

張讓が呼び寄せた少女の名前は周泰。正史では呉の宿将として活躍する将で、孫権の命を救ったとして、孫権から厚い信頼を得た将でもある。そんな名将である周泰は、ここでは優秀な諜報官であり、見様によつては忍者に見えなくもない姿をしている。

そんな外見を裏切ることもなく、彼女は実に忍者然としていた。

「曹操様の軍には、既に私の友人である徐晃が話を通してくださるらしく、都から数里離れた場所で天幕を張っているそうです」

「それでは、明命、栞。華琳姉さまの元に参りますよ」

劉協が都を後にしてから、僅か数日後の出来事である。劉協の住んでいた屋敷が全焼となる火事があり、その火は洛陽の街を荒らしまわった。劉協も脱出が少しでも遅れていれば、今頃焼死体になっていたことであろう。

その後、帝は謎の死をとげ、何進によって劉弁が即位させられると、諸侯は何進を推す派閥と、謗る派閥に分裂することになる。しかし、その争いもそうそう長くは続かないのである。

『皇帝：我が最愛の妹、劉協を曹操が捕えている。この無道を正すため、諸侯の力を得たい』

このような文が、諸侯に届くことになったからである。それは、黄巾党であつても例外ではなく、張曼成の下にも届けられた。というのも、張曼成は元々何進とのつながりを持っていたからに他ならない。

公孫贊、袁紹、馬騰、孫策……。大陸を代表する諸侯に届いた文は、しかし董卓の下には届かなかった。何進にとってみれば、治世に長け、民衆の心を掴んでいた董卓は邪魔者に過ぎなかったからである。

時は、劉協が陳留に着いた日にして、徐州黄巾党と御厨春斗の陣営が戦をしている最中である。

―陳留・曹操軍―

「華琳様、このような文が、諸侯に……」

「……反曹操連合、ねえ」

「申し訳ありません、華琳姉様……。私がここに来てしまったばかりに」

「いいのよ、水海。私の覇道を彩る諸侯と面と向かってぶつかり合う……最高じゃないの」

曹操軍にも、反曹操連合の噂は伝わっていた。反曹操連合に所属しているのは、孫策、馬騰、袁紹、公孫贊、何進、張曼成……。更には南部の荊州を治める、俗に荊州四英傑と言われる四人。果てには南蛮の国を治めている孟獲までもがこの連合に参加を表明してきたのである。

それだけ巨大な連合を相手にするのにもかかわらず、曹操は嬉しそうに笑うだけだ。

「そういえば、この連合には董卓は参加しないのかしら？」

「董卓の一軍ですが、徐州の陶謙領に現れていた徐州黄巾党の討伐に向かっている途中でした。どうやら、何進に意図的に除外されたようです」

「……今は徐州と言うことは、春斗の陣営と行動をともにしていると言うことかしら？」

「そのようですねー。桂花ちゃんから、少しばかりの小言の入った報告書が届いたのですよー」

曹操の軍師である郭嘉と程？は、現在の情勢をしっかりと読み取っていた。今、曹操軍が置かれている状況は、確かに危険な状態である。しかし、曹操軍にも、この連合に対するだけの備えがあるのだ。

「明命も、そろそろ春斗のいる下？に着いている頃でしょう。陶謙、董卓、それに春斗の陣営を加えれば、兵力では劣っても将の質で勝てるわ」

「その通りですねー。お兄さんや春蘭ちゃんに代表される武官だけでなく、春斗さんの陣営には優秀な文官もいるようですよー。何より、天下無双として知られる呂布がいるというのも心強いですねー」

程？の指摘した、曹操軍の強みと言うのがそこである。兵力で勝てなくとも、将の質では、明らかに他の陣営を圧倒しているのである。また、今回のように大義名分のない連合であるのなら、一度こちらとの話し合いの席につかせることができれば、味方に引き入れることも不可能ではない。

その点、多くの内政官や軍師レベルの知識人を有する御厨春斗の陣営には、早めに引き戻しておきたいと言うのが、軍師陣の共通認識であった。

「栞、あなたも華琳姉様の為に尽力しなさい。朕達のために、華琳姉様を危険な目に合わせてしまっているのだから」

「はっ、仰せのままに。こちらの陣営についてくれる者がいないか、私達でも探ってみましょう」

「……そう言えば、一人人脈には事欠かなそうなのがいたわね。荊州側の説得でも頼んでみようかしら」

その人物というのが、少し前まで襄陽の太守であった劉表である。彼女は、周囲から女狐と呼ばれるほどに、猜疑心が強く策に長けている人物であり、襄陽太守時代に彼女と懇意にしていた人物は多い。

故に、この局面では頼れる存在である。

……しかして、その本人はと言えば。

「一刀ちゃん、もう一回、もう一回だけしたら政務に戻るから！」

「狐狸……、そろそろ勘弁してくれ……」

「お願い、ね？ 一刀ちゃん？」

「……後一回だけな？」

「一刀ちゃんってば、話が分かるわね！ やっぱり、一刀ちゃんって最高だわー！」

劉表はと言えば、文官としての仕事をきつちりと中断してから、北郷一刀の部屋を訪れていた。劉表も、魏の三羽烏や、一部の武官のように、既に一刀の毒牙にかかってしまっているのである。

と言っても、実は時間はまだ夜ではなかったりする。劉表は、自分の仕事のノルマを半分ほど終わらせてから一刀に行方をねだっていたのだ。

真昼間から、このような色事に及んでいれば、当然ながら怒る将も出て来るといふもので……。

「狐狸ちゃん？ 風は、とても大事な仕事を狐狸ちゃんに任せた筈なのに、どうして狐狸ちゃんはお兄さんを昼間から独占しているのですかねー？」

「げえつ、風！？」

「お兄さんもお兄さんですよー？ 求められたからと言って、昼間

から行為に及ぶのはどうかと思うのですよー」

「そういう風だって、昨日は一刀ちゃんと一緒に寝てたでしょう？」

「風はきちんと仕事を終わらせてから、お兄さんと楽しんだのですよー？　だと言うのに、狐狸ちゃんと言えば仕事を終わらせもしないでお兄さんと楽しんだりして……風は怒っているのですよー？」

……当然のように、怒る将は存在するものである。とは言え、そのベクトルはと言えば、将として軍内の規律について言及したものではない。その怒りは、私怨や嫉妬から来るものであり、見る人によつては微笑ましいものとして映ることだろう。

しかし、その怒りを眼前で受けている彼らにとって見れば、それは般若としてしか映らなかつたのだらう。

「あはは……、一刀ちゃん？　後はよろしく頼んだわよー！」

「狐狸っ！　せめて、服を着てから外に出るよ！」

「さーて、お兄さん？　風は仕事をきつちりと終わらせてきたのです、言いたいことはお分かりですね？」

そんなこんなで、曹操軍がピンチに陥つても、天の御遣いの行動は変化することがないのである。

―徐州・下相県・村落―

「……降参するなら、今のうち」

「形勢逆転ですね。御主君に仇なしたご自分を恨むことです」

呂布と華雄が村落にたどり着いたことで、すっかりと形勢は逆転していた。それも、仕方のないことかもしれない。いくら異形や呪いを操れると言っても、彼女達はもともと武官ではないのだ。天下の武にかなうわけもなく、戦力の面で、完全に劣っていると言わざるを得なくなっていた。

孟達は現状に舌を打ち、太史慈の獲物が、今にも諸葛瑾を討ち取るうとしているために、諸葛瑾はただ震えることしかできていなかった。

「それでは、御覚悟を！」

「お姉ちゃんも、そつちに、行く……の？」

遂には、太史慈が諸葛瑾の首へと武器を振り下ろす。後数秒、瞬きを何回できるかも分からないぐらいの短い時間の間で、御厨春斗は直前まで口を開かなかった。

「雲里、止める！」

そんな春斗が下した結論は、『討ち取ることを良しとしない』と言ったことだった。当然ながら、敵将を討ち取ることや、主君を殺害しようとした者に課される極刑などに際して、主や第三者が行為を妨げようとすることはあまりない。

正確には、妨げられようにも、執行者が止まらないというほうが正しいのかもしれない。

「ごっつ、御主君っ！？ 明確な敵意を持つ相手を生かしておくことは、御主君の生命を甥や貸すことになるのですぞ！」

雲里がそんな春斗の行動を嗜めようとした事は、配下として当然のことといえるだろう。ましてや、春斗には武官としての才がない。そんな中、無駄に敵を増やすような行為の一つである、無傷で解放するなど、言語道断と言いたかったのである。

それだけではなく、妲己の例もある。春斗の周囲にいる人材の質から考えると、春斗の人を見る目は確かに確かに認められるのではあるが、これではいつ危険な目にあうか分からないのである。

「……あなたは、朱羅を殺さないの？」

「ああ、殺さないさ。雲里、二人を捕虜として丁重に扱え」

「しかし、御主君！」

この期に及んで、自分を殺そうとした相手を捕虜として、それも丁重に扱えとまで命令を下した春斗を諫めようと声を張り上げるものの、春斗の命は覆らない。

太史慈は深く溜息を吐くと、その手を掴んで二人を連れて行こうとするが、諸葛瑾はその場を動かない。ただ、春斗のことをじっと見ているだけだった。

「……あなたも、朱羅から皆を奪うの？　もう、お姉ちゃんには何も奪われる物もないのに……？」

「……もし君が何も持っていないというのなら、私のものになれ。寂しい思いをしているのだろう？」

「ちょっと、ご主君！　何を言っておられるか！」

この爆弾発言に、最初に声を荒げたのは太史慈である。それも当然のことであろう。守るべき主君が、敵將にこのような言葉をかけたのでは示しがつかないというのもある。

しかし、もう一つの理由がある。自身を呈してでも守ろうと誓った主君が、他の女性を目の前で口説いていることが、気に食わないのである。

「……お姉ちゃんにも、家族ができるの？ ……友達ができるの？」

「ああ、だから安心することだ。心配するな、……私の陣営は強い」

「ん……、おとなしくしてる」

今までの攻撃性、さっきの類はなんであったのかと問い詰めたいほどに、諸葛瑾の纏う雰囲気が変わっていた。今までの敵を相手にする視線が、家族を目にするような優しいものになっている。

とは言え、諸葛瑾の身体からは今も黒い瘴気のようなものがあふれ出ており、春斗陣営の兵が恐る恐る諸葛瑾へと近づいていく。

「……既に結果は分かりました。これ以上争うことはないでしょう」

「明里ちゃん、今出て行ったら危険だよっ！？」

「いえ、明里の言う通りね。援軍側に贈った戦力は全滅、既に董卓・曹操の両陣が接近中。もはや私達には勝ち目はないわ」

絶体絶命のピンチを切り抜けた後、黄巾党の首魁でもある波才を加えた三人が春斗の前に姿を現す。その目的はただ一つしかないのである。三人は既に決意を決めているようである。

「ここに来たということは、降伏でもするということが？」

「用件が分かっているのなら話は早いわ。私は徐州黄巾党の首魁、波才よ。我が軍は、一兵に至るまで、貴軍への降伏を望むわ」

「何を突然言い出してくるか！ 今までの行いを忘れたとは言わせないぞ！」

「春斗様は、それを認めると仰ると思いますが、今回ばかりは雲里ちゃんに賛同させてもらいますよ？」

波才の、ひいては徐州黄巾党の目的は、御厨春斗への全面的な降伏である。そのような行為を当然許すわけには行かないとばかりに、太史慈が怒声を上げる。

そんな太史慈に、陸遜が追隨する。今回ばかりは賊軍である黄巾党を召抱えることに、旨味はあれどもその点、不利になる点も多いからである。軍師としては反対の立場をとらざるを得ないのだ。

「……私は徐庶。黄巾の軍師をしている者です。まずは、こちらの書状を確認していただきたいのですが」

「……春斗様、これが本当のことだとすれば、大変なことですよ！」

徐庶には、一つの秘策がある。この時期に届けられた書状である。曹操の周囲の諸侯にも同様の書状が届けられているであろうし、そうなれば曹操軍がその情報を掴むのも時間の問題だと考えていたのである。

それ故に、徐庶は御厨春斗の陣営に降伏するために、都から送られてきた書状を陣営に見せたのである。その書状とは、言わずもがな

対曹操包囲網の書状である。

「……これが本当だとしたら、私達に降伏するための手土産と言うところか？」

「それも一つの理由ですが、張三姉妹を危険に曝すのは私達の本意ではないのです。三姉妹を保護するに値する軍団とお見受けして、今までの非礼を詫び、どうか貴軍の軍門に下らせていただきたい、それが私達の目的です」

徐州黄巾党の首魁である波才は、軍師である徐庶が作った好機を逃さないようにして、春斗軍勢に、今までの非礼を詫び、降伏を認めてくれるように頼んでいく。

「春斗、ようやく追いついた！ 今、華琳様から急な伝令が着いたわ！」

春斗がどうしたものかと考え込んでいると、そこに荀？率いる曹操軍が合流する。荀？の持ってきた情報、波才達の運命を決定付ける。

「何進の奴が、対華琳様包囲網を構築したわ！ 味方につけられる者は、例え賊軍であれ仇敵であれ、味方に付けるとのご命令よ！」

「……だそうだ。華琳様の命の下、貴軍ら徐州黄巾党を我が軍に迎え入れる。ただし、少しでも怪しい動きを見せれば容赦はしないから、覚悟しておくことだ」

「はっ！ 我等、徐州黄巾党は今後春斗殿、曹操殿に忠誠を誓うことをお約束申し上げます。私は、姓は波、名は才、真名は梅琳。梅琳

とお呼び下さい」

「……姓は徐、名は庶、真名は明里です」

「私の姓は張、名は紘、真名を和と申します」

「他の者も、この方針に反対する者はありません。今後とも、何卒
よろしくお願い申し上げます」

かくして、徐州黄巾党の全面的な降伏と言う形で、下相県の戦いは
終結した。戦いの後に残った村は、まるで最初から襲われる場所
になかったとも言うように、殆ど戦の傷痕を残していなかった。

徐州黄巾党と春斗の軍においても、怪我人こそ多く出たものの、
死者は両軍合わせて百人にも及ばないほど、軽微な被害に留まっ
ていた。

城に戻ってから、正確に徐州黄巾党の面々が軍の席に加えられ、
黄巾党の兵は「徐州兵」として、部隊編成に加わることとなる。

初陣としては厳しい戦いとなったものの、その戦いは様々なもの
を御厨軍にもたらした。しかし、この戦いというものも、今後続いて
いく長い長い戦の歴史の、僅か数ページにしか満たないのである。

【黄巾征伐編・第五話】 暗雲渦巻く洛陽（後書き）

―後書きという名の懺悔―

皆様、お久しぶりでございます。今話にて、黄巾征伐編が終了いたします。次回から、対連合の戦いが始まっていくことになるわけですが、まだまだ折り返しの折り返しにも達しておらず、その先にも長い道標がありますので、長らく贖罪にしていただければ幸いです。

今回で特筆するべきは、初登場の劉協と張讓、劉表の三人ですね。劉協は、結構様々な作品で女性として描かれておりますので、そこまで珍しくないのですが、張讓を女性且つ、味方の陣営で描く方はあまりおられないのではないでしょうか。ここの張讓は攻略対象です、悪しからず。

劉表ですけども、実は結構気に入っているキャラだったりします。年齢的には、黄忠などと同じような姿で考えていただければよろしいかと思います。無論、あんなに胸は大きくはありませんけれども。

それと、ようやくヒロインである荀？と合流しましたね。これで次回以降荀？成分も補えると思います。

原作キャラの配置が、全くもって異なっているのは、見ての通りだと思いますが、まだ初期配置が違う人物もおりますので、そこはご容赦願いたいと思います。

それでは、また次回にお会いしましょう。

【孫家併合編・第一話】 恐ろしき異民族

—涼州・武威—

「母上、対曹操包囲網に参加しても、我が軍に全く得がないのではないのですか！」

「落ち着いてください、翠お嬢様。今包囲網に参加しなければいけない理由の一つに、参加することの得の少なさよりも参加しないことの不利益の方が大きいのですよ」

「聖の言うとおりよ、お嬢？ 現状、我が軍は西方の異民族に苦戦しているけれども、連合の一端を担えば、近くの連合諸国からの援軍も要請できるかもしれないの」

「何進は何を考えているか分からないから援軍が来るかは分からないけれど、少なくとも張魯は送ってくるでしょうね。我が軍が落ちたら、異民族の脅威にさらされるのは張魯でしょうし」

西方の国に、騎馬を売りにしている、馬騰率いる軍が存在する。大陸の中でも、西涼の騎馬隊といえば一二を争うほどの精強さを誇っている。そんな馬騰軍もまた、反曹操連合に加盟している国の一つである。

しかし、西涼から曹操軍のいる中原までは距離も遠く、例え加盟していても戦端を開くことがないかもしれないことは明白であった。馬騰の娘である馬超にとってみれば、漢中の張魯や晋陽の丁原辺りを飲み込めるだけの力があると言うのに、武威から天水の涼州に蓋をされるような形になる状態での連合加盟には異議しかなかった。これでは、みすみす勝利の機会を失うことになるのではないかと

懸念していたからである。

「お姉様、西方の異民族の感想を聞かせてあげようか？」

「西方の異民族ですが……、周囲に氷を振りまく者、大剣を振り回す黒い者、空で歌っている者……。本当に人間なのでしょうか」

「紫苑から見ても、勝てないと思わせるぐらいの相手なのかしら？」

「あれが並みの相手なら勝てるかもしれないけれど、飛翔する矢を凍らせて防ぐような異能が相手では……」

「と言うわけよ、お姉様？　焰耶と桔梗は前線で負傷したし、相手が悪すぎるよ」

西方からの偵察から帰った馬岱と黄忠からの新しい報告がもたらされると、軍議の間がざわめき立つ。既に異民族の情報として入っていたのは、四人の将軍がそれぞれ異能を持っているということだけだった。そこに入ってきた新しい情報は、馬軍の将軍や軍師の士気を失わせるぐらいには強烈な情報であった。

曰く、『青い髪の女は、冷気で矢を防ぐ』。曰く、『大剣を持つた女は、突如として黒を纏う』。曰く、『夜に歌声が聞こえると思うと視界が段々と失われていく』。曰く、『緑の髪の女に近づいたら、季節外れのスズメバチの大群に襲われる』。

例え騎馬隊が大陸で一二を争うといっても、空にいる相手には効果がない。空にいる相手には矢が届くといっても、その矢を打ち落とされるのでは意味がない。

そんな中でもたらされた異能の情報は、しかし、打開策を生み出すには至らなかったのである。

「唯一の救いは、こちらから攻め込まない限り、進行してくることはないことぐらいかしら」

「それでも安定を失ったことに違いはないわ。翠明、直ぐに軍を再編して異民族の侵攻に備えるべきよ」

「……聖はどう考えているのかしら？」

「大方は初里と同意見です。しかし、そこに付け足すとするならば……」

「付け足すとするならば、どうするのかしら？」

「保護した羌族も末席に加えるべきかと」

馬騰の軍師である韓遂と、武と知の双方で信頼できる将である？徳の助言を受けて、馬騰は終に羌族に一軍を率いさせることを決める。

もともと、馬騰は羌族と友好的な関係を結んでいただけあり、馬軍・旧羌軍の軋轢はない。羌の地を追われた羌族の王・徹里吉。元帥である越吉と宰相の雅丹。いずれも保護できた頃には重体であり、つい最近その容態が回復したばかりなのである。

本当ならば、そのような状態にある彼女達を戦場に出すことは憚られるのだが、状況がそれを許さないことは馬騰の目から見ても明らかだった。

「これより我が軍は、西方異民族に備える。曹操軍のことは一先ず後回しにし、異民族からの領地防衛を最重要事項にせよ！ 翠、紫苑！ いつでも出られるように兵の訓練を怠らないようにしなさい！」

「はっ！」

かくして、外史の平穩にまた一つの輝が入る。夢と幻が詰まった無数の外史、その外史の一つが影響を及ぼし始めているのである。

―幽州・北平―

「あれはなんなんですの、白蓮さん！ あれはもはや戦争でもなくて、蹂躪ですわよ！？」

「桃香達や烏丸、それに桃静達と力を合わせても勝てない相手だぞ！ 一軍だけで突撃すれば、そんな結果は目に見えているだろ！」

北方では、反曹操連合に所属する袁紹、公孫瓚、劉虞、劉備の四ヶ国が北方異民族からの防衛に力を注いでいた。この内、平原の相である劉備と南皮を治める袁紹は隣接する親曹操派閥である陶謙と、曹操本軍を警戒せざるを得ず、北方異民族に全力で当たることはできていなかった。

「んー、麗羽様？ 例の奇妙な武器をどうにかして解明しない限り、私や朱里達で話し合っても打開策は出てこないですよ？」

「北方異民族の御旗……、赤いあの旗を見たら即時撤退して時間を稼ぐ……。桃香様、今の段階で提示できる防衛策は思いつきません……」

「奏殿や朱里殿がこう言われる以上、私達では時間稼ぎしかできないでしょうね。早くにあの武器さえ解明できれば、あるいは……」

袁紹の軍師である田豊と、劉備の軍師諸葛亮、それと劉虞軍君主の劉虞が話し合って出てきた結論を袁紹と公孫賛、劉備の待つ玉座の間で発表する。

北方異民族は、奇妙な長距離兵器を集団で使ってくるため、精強な白馬陣も、烏丸の騎馬もまるで歯が立たないのである。

味方側の弓隊によつて、少しばかりの被害を与えることには成功したものの、敵方は怯むことなく前進を続けてくるのである。

「姉上！ 異民族が攻め込んできましたぞ！」

「くっ！ ここを退くわけにはいかないし、相手を撤退に追い込むまで籠城だ！」

北平には、袁紹と劉備の主力を含む大規模な軍隊が留まっている。これだけの兵力ならば、勝つ事はできずとも負けることはないという公孫賛の判断である。

この予想は大きくは外れてはいない。勝つ事はなくとも、負けることはない。ただし、その強大な力を目の当たりにせざるを得ないのだから、ある意味では『負け』に等しいのかもしれない。

「親愛なる同志諸君！ 私達の理想を阻もうとする者が目の前にいる！ それならば、これしかないわよね？ 今こそ、反乱分子を総粛清する時よ！」

北方四国を相手にしているのは、唯一つの軍隊。しかし、史実では大きな業績を修めている『彼女』も、この外史では一人の革命家に過ぎない。

理想を阻む者は全て敵という狭い視野を持ち、盲目的なまでに自身その考えを信じて疑わないその少女は、しかし非常に心根は優

しいのであった。

見事なアホ毛を靡かせる少女、ヨシフ・スターリンの理想は、『全体主義による、平和で平等な世界』なのである。

しかし、聡明な彼女には一つだけ理解していることがあった。

「これでは私は侵略者ですね。……また人が離れていけば、肅清の炎を上げなければいけない。……どなたか、私達を打ち破るだけの力があり、私達の理想に共感してくれる人はいないのでしょ

うか」
彼女が軍を率いていられる時間はそこまで長くはないであろうということである。彼女は『平和で平等な世界』を謳いながら他国を侵略しているのである。必然的に彼女の求心力は徐々に低下し、何れは軍も瓦解していくであろう。

それが分かっているからこそ、彼女は自身を超える求心力を有する勢力を目指しているのだ。

「……可能性があるのは曹操軍と何進軍でしょうか。寒国からの長旅故、確固たる成果があればよいのですが」

彼女の理想を否定する者は多い。彼女に同調する者も、心のどこかで理想を疑っている者もいる。

そして、彼女自身も理想が必ずしも正しくはないことを知っている。この世に、完璧な理想などないのだ。表面ではそのようなことを少しも見せない彼女にも、弱い部分がある。

彼女は、『理想を抱いて死ぬ覚悟があるか』と言われれば、頷けるだろう。しかし、『抱いている理想以上のものが存在しないのか』と尋ねられれば、即座に首を縦には振れないだろう。

彼女には自覚がある。彼女が理想のために多くの人々を不幸に陥れてしまったという自覚と、それに対する大きな自責の念が、胸中に渦巻いているのである。

く 拠点フェイス・桂花 / 彼の初めて、彼女の初めて く

下相県での戦いを終えて下？に戻ってきた後、御厨春斗は体調不良を訴えて自室に閉じ籠ってしまっていた。既に何度も戦場を経験した彼女達には、そんな春斗の状態が理解できていた。

「……御厨は、初陣だったのね」

「春斗はもともと天の国の人間よ。天の国には戦もなく平和だったらしくて、春斗が今までに意思を持って傷つけたことがあるのは1度だけよ」

「……その一度って言うのは？」

「春斗がこの世界に下りてきたときよ。春斗は私にとって命の恩人だから」

「……ってことは、人を殺したことがあるんじゃないの？」

「多分死んではないと思うわ。それに……あの時の春斗は瀕死の重体になってたから、細かいところまで覚えてはいなかったのよ」

下？城にある軍議の間で、曹操軍軍師である荀？と董卓軍軍師である賈馱が協議を行っていた。二人が行っていた協議の最初の議題は、董卓軍の今後のことである。

結果的に、董卓軍は曹操軍と行動を共にすることが決まり、同盟的な立場に留まることになったのだが、肝心の董卓が同盟軍ではなく曹操軍の傘下に入ることを希望したため、最終的に董卓の陣営は

曹操軍の一団を担うことになった。

そんな中で、話題に上がったのが名目上下？方面の司令官になっている天の御遣いの片割れである御厨春斗のことであった。

「なるほどね。とはいえ、 magari なりにも司令官なんだから、それぐらいの覚悟を持って臨むべきだったんじゃないかしら」

「私達が慣れてしまっていたのかもしれないわ。私も最初はあんな風だったことを改めて思い出したぐらいなのよ。……配慮が足りなかったと言わざるを得ないわね」

「きちんと精神療養は行ったほうが良いわね。曹操軍の中では新参者になるボク達は、曹操軍本隊ではなく別働隊に組み込まれる可能性もある。司令官が御厨だったとして、毎度毎度これではどうしようもないし」

「今回の黄巾党征伐によって、春斗の評価は上がるかもしれないわね。魯肅や糜竺以外の面々は今までに全く功を立てていなかった将彼女達の起用によって、人を見る目、適材適所の考えを評価されることは間違いないわ。……華琳様が、引き続き司令官に立てる可能性も高いわね」

両軍の軍師が共通して出した見解がこれである。『御厨春斗の精神をアフターケアし、戦場及び戦乱に慣れてもらう』ということである。

戦乱のない世界から来た春斗に対して、如何に残酷なことを課そうとしているのかは、二人とも理解できている。しかし、そのようなことを課さなくては軍として生きていけないような状態になっていることを知っているからこそ、軍師としてその決断をしなくてはならなかった。

將の質では完全に曹操軍が勝っているとはいえ、四方の異民族がいなければ埋めることのできない兵力差に押しつぶされるのが関の山なのである。

「……春斗なら大丈夫よ。あの北郷だつて、克服できたんだから」

「もう一人の御遣いのことね？ これぐらいでへこたれるような人材を天が送ってくることはない……ということかしらね。それなら……文官系の將軍の面倒は文官か軍師が見るべきね。……ボクが見に行く？」

「……魯肅や糜竺、陸遜達に見せに行かせてもいいんだけど……。ここは私に見に行かせてもらえないかしら？」

「……桂花、それは御厨が命の恩人だからかしら？」

「……そうね、私が春斗を巻き込んでしまったのも一つの理由だとは思うわ。もう一つの理由は……、春斗が苦しんでいるのを見るのが辛いからよ」

荀？の搾り出すような声に、賈馱はそれ以上は何も言わなかった。決意を持った軍師ほど、自分の意見を変えようとは思わないからである。

自身も、董卓の様子を見に行くと言ったとき、第三者がその結論を否定したとしても、意見を変えることはない。それが分かっているからこそ、賈馱はそれ以上のことを言えなかったのである。

それだけでなく、賈馱には一つ確信があつた。荀？の決意は本物である。

……それ故、ここは荀？に任せることが最善手であるということを確認していたのである。

―御厨春斗―

「春斗様、ご飯食べないと調子戻りませんよ？」

「今はまず喉を通らない……、今は放っておいてくれ、穏」

「琉流ちゃんの作ってくれたご飯、本当に美味しいんですよ？」

「どんなに美味しくても、今すぐには食べれない……。取り敢えず、その机の上に置いておいてくれ……」

「本当に大丈夫なんですか、春斗様？ 辛そうな表情を見るのは、私としても辛いんですよ？」

先の戦が終わって、戦場の空気から開放されてからと言うものの、突如として襲ってきた急激な吐き気。私が、多くの味方の兵と敵方の兵を傷つけ、あろうことかその一部を殺してしまったことに気が付いてしまったのだ。

気が付いてしまったというのは、少し嘘が混じってしまっているのかもしれない。本当は最初から気が付いていたのだ。私は戦場の空気に身を任せることで、その事実から目を反らしていたのである。

「春斗様、琴音です。司馬懿、孫堅、典韋の三人の登用が完了致しました。村の復旧作業には旧黄巾党の面々と村の面々が協力し合って当たっておりますが……」

「……そうか。司馬懿殿は文官、軍師関係の役職に。孫堅殿と典韋殿は將軍職に抜擢しておいてくれ」

「孫堅殿が春斗様との面会を求めています、どうなさいますでしょうか？」

「申し訳ないが、今日は体調が優れない。明日までにはどうにかするから、明日まで待っていてくださいくれ」

「畏まりました。……春斗様、辛いようでしたら誰かにお話してみてはいかがでしょうか。私や穩、雲里はいつでもお話を伺いますよ」

琴音はそう言ってくれるものの、彼女達を部屋の中に招くだけの気力もない。今日は一端全てを忘れて休みたいぐらいなのだ。

この時代に来て暫く経つものの、今までこの世界に慣れたと思っていたのは全くの偽りだったのだろう。慣れていたはずがない。戦乱の世に立つて、天の御遣いの片割れとして奉りあげられたことで治世者ぶっていただけなのだ。世界や民衆、それだけでなく味方である彼女達のことですら、私は上辺しか見ていなかった。

生活のすぐそこに転がっている、血と狂気に満ちた戦場を、意図的に見ないで来ていたのだ。私など、指揮官でも、御遣いでもなんでもない。それこそ、ただ自己満足に浸っていた大馬鹿者でしかないだろう。

穩も琴音も雲里も、皆覚悟を持って戦場に立っていた。それだといふのに、指揮官として他の人間の命を背負い、その命の重さを理解していないといけない立場である筈なのに、私は立場の上に胡坐をかいていただけだ。

……人の命の重さを今になって知るとは、本当にたいした馬鹿だよ、私は。

「私は……どうするべきなのだろうか」

答えなど出ない。出るわけがないのだ。この世界から逃げようと

しても、私はもう誰かの命を殺めてしまった。あちらの世界に戻れたとしても私には罪ができた。あちらの世界に再び馴染むことなどできないであろう。

ふと気が付くと、扉がノックされた。扉をノックして、中の人に確認をとる方法を教えたのは、元々華琳様の軍に居た者が、私の陣営に居た者ということだが……穏や琴音はもう一度来ることはないだろう。となると……、いったい誰だ？

「……春斗、起きてる？」

「その声は……、桂花か。こんな時間にどうしたというのだ？」

「少し、春斗と話をしようと思って。入ってもいいかしら？」

「ああ、扉は開いてはいるが……今の私はとてもじゃないが面白い話はできないぞ？」

「きちんと扉の鍵は閉めて寝なさいよ？　今の春斗は我が軍にとって、欠かせない存在なのよ？」

「そんなことはないだろうよ。……私は馬鹿な指揮官だよ。戦場と言うものがどういうものなのか、私は理解していなかったよ」

「誰だって最初はそうよ。一番最初から戦場の空気に慣れている人間なんて、殆どいないわ。生まれながらにして王の素質を持つ者が、それともただ狂気に染まっている者か。……大丈夫、春斗は正常よ」

部屋に入ってきた桂花は、私が横たわっているベッドの縁に腰掛けて、私の頭に手を置いた。以前華琳様に聞いた話だが、桂花は極端な男嫌いであったと聞く。極度なまでの男性恐怖症が引き金だっ

たらしい。

そんな桂花が、男である私の頭に手を置くことなど、考えられないことだった。彼女にとって、相当の覚悟がないと出来ない行動だろう。

「ねえ、春斗……。私は春斗に伝えないといけないことがあるのよ」

「今後の私の身の振り方……か？」

「その通りよ。私は華琳様に、今後も引き続き方面司令官としての起用を進言しようと思っているわ。冷酷なことを言うかもしれないけど……立ち直って欲しいのよ」

「私が司令官となっている以上、私がこうでは軍全体を危険に曝すから……。か。分かってはいるんだが……」

「違うのよ！ 私が春斗に立ち直って欲しいのは、軍のためじゃないのよ。……辛そうな春斗を、見ていられないから。私の勝手なわがままなのよ！」

「桂花……？」

「春斗……。少しだけ、昔の話をしましょう。私がどうして、男嫌いになったのか……」

桂花がどうして男嫌いになったのかは、華琳様も聞いたことがないらしい。何より、華琳様は女性だ。男性嫌いになった理由を聞く必要もなかったのかもしれないが、そんな重要な話を私にしてくれると言うのだから、桂花には信頼されているのかもしれない。

問題は、その信頼にこたえることが出来ない私自身なのだが……。

「私は、子供のときから男性に縁がなかったのよ。父親の友人に迫られたこともあったし、街が戦渦に巻き込まれたときにも敵の兵達に酷い目に合わされたのよ。そんなことが子供のときにあったから、男なんて信用できないと思っていたわ」

「……」

「それでも、あなたは私に一つの可能性を示してくれたわ。この世の男全てが信用出来ないというわけではないという可能性を。本当はただの吊橋効果だったのかもしれない。一時の気の迷いだったのかもしれない。それでも、……私にとって、あなたは唯一の男性なのよ。私が信用できる……、信頼できる、唯一の」

「……」

「今の私にとって、一番大事なのは華琳様。これは譲れないけれど……、春斗だって大事な。少なくとも、華琳様以外の、他のこの国のどの人間よりも、よ」

「……買い被り過ぎだ、と言いたところだが。そこまで言われれば、意地でも立ち直らなければな。桂花……、ありがとうな」

「べっ、別に良いのよ！……今日は私が傍にいてあげるから、安心して寝て良いわ。明日から、また一緒に頑張らしましょう？」

桂花も、昔は同じようなことがあったのかもしれない。その時に傍にいてくれたのは、恐らく桂花の母親だったのだろうか。少なくとも女性だったことは間違いないだろうが。

とはいえ、桂花が傍にいてくれたことで、私も少しだけ安心して

眠れたことは間違いない。この世界に来て、一番親交が深かったのは、他でもない桂花だ。私の中でも、桂花の存在が大きくなっていることは間違いないのかもしれない。

翌朝、私と桂花は別の女性の声で目が覚めた。やたらと大きな声を出すものだから、飛び起きてしまったのである。

「ちょっと！？ どうしてぽつと出の女が春斗と一緒に寝ているのよ！」

「……何よ、煩いわね。……って誰よ、あんたは」

「それはこっちの台詞よ！ いきなり出てきて、春斗を横から掠め取っていくなんて！」

「掠め……？ って、春斗！？ なんでアンタが私の天蓋で寝てるのよっ！？」

「落ち着け、桂花。ここは私の部屋だ」

「んなっ！？ ……私、あのまま眠っちゃったの！？」

「……苟？さん？ 少し、向こうでお話しましょうか？」

扉の外に立っていた琴音や縁、穩に、部屋の中にいた地和が桂花に詰め寄っていく。現状が理解できていない桂花は、為す術もなく連れ去られていった。

……隣の部屋から大きな悲鳴が聞こえたのだが、私にはどうしようもない。

「御主人様、朱蓮様がお待ちですよ？」

「璃燐か。分かった、準備は整っているから、案内してくれ」

桂花、出来れば女性恐怖症も併発しないで欲しいところだ。
それと、出来ればふがない私を許してくれ。

【孫家併合編・第一話】 恐ろしき異民族（後書き）

>後書きと言う名の処方箋<

随分と長く時間が空いてしまいましたが、急激に体調を崩しまして、入院しておりました。まだ体調的には本調子ではないのですが、退院もし、職場にも復帰いたしましたので、何とか回復といってもいいかと思います。

何はともあれ、突然更新が中断してしまったことをお詫び申し上げます。

今後の日程ですが、かなり不確定となっております。月に南海更新できるかも分かりませんし、次の更新がいつかも分かりません。生活が一段落つくまでは、思うようには行かないかと思いますが、ご容赦願えればと思います。

ただ、一言だけ伝えるとするならば。

糖尿病には、気をつけてくださいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4371m/>

もう一人の御遣い様

2011年2月18日12時06分発行